

---

# バカと転生者と召喚獣

來霧

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカと転生者と召喚獣

### 【Nコード】

N3076X

### 【作者名】

來霧

### 【あらすじ】

ある日仕事をしていた花村左月。だがその仕事の休憩中に事故に会いそうになった人を助けた。けど自分は死んでしまい、そして神テオスによって『バカとテストと召喚獣』の世界に転生させられた。左月は文月学園の生徒達とどうやってすごしていくのか！

## 登場人物（前書き）

これが始めてなので駄目なところとか、バカっぽいところがあるかもしれませんが自分なりに頑張ってみますので、どうぞよろしくおねがいします^^

オリキャラ  
登場人物の紹介です。

P S 途中で変更などすることがあると思います。

## 登場人物

はなむら  
花村 左月 さつき

身長：156cm 体重：34kg

誕生日：12月13日 血液型：B型 利き腕：右

性格：人見知り 自分を隠して人に接する 内側ではいろいろと面白がっている  
ノリが良い

言語：自分が認めた人には普通にタメ それ以外の人には敬語  
人称は僕

頭脳：英語以外破滅的

視力：少し悪い 黒ぶちの眼鏡をかけている

体格：スレンダーで締まっている 体力が無い

趣味：ゲーム 音楽鑑賞

特技：鉄扇術 隠し事（演技）

好きなもの：辛いもの 音ゲー アクションゲーム 落ちゲー 音  
楽 おもしろいこと

嫌いなもの：甘すぎるもの 勉強 お化け

召喚獣：着物をきて簪かんざしをさしている。武器は鉄扇に鎖（西遊記映画、金角大王の武器）が付いているやつ。

腕輪：『鎖の雨』

鎖の雨を降らせる。1本につき20点消費する。そのまま操ることができる。

藤村 奏汰ふじむら そうた

身長：178cm 体重：52kg

誕生日：10月3日 血液型：AB型 利き腕：左

性格：冷静 思いやりのあるやさしい人 負けず嫌い

言語：淡々とした喋り方 一人称は俺

頭脳：化学が得意 左月の得意科目を知ったとき以来、英語も得意教科になった

視力：無駄に良い

体格：スレンダー 運動神経がとても良い

趣味：読書（推理物が多い） 背景画を描く

特技：料理

好きなもの：猫 静かな所 高い所 芸術的な絵 作品

嫌いなもの：苦い物 臭い物

召喚獣：ベレー帽の少し汚れたエプロン。職業で言う画家の格好。  
武器はペン。意外と威力が高い。槍のようにして攻撃する。

腕輪：『写し絵』

相手の腕輪の能力をそっくりそのまま使える。ただし使った相手の消費点数+100点消費してしまう。相手が腕輪を使えなかったら相手の武器をそのまま使える。これは消費点数100点。

テオス

身長：170cm 体重：55kg

誕生日：不明 血液型：不明 利き腕：両

性格：明るい 好奇心旺盛

言語：気軽な感じ 一人称は俺

頭脳：なんでも知っている(?)

視力：なんの問題も無い

体格：奏汰と同じ

趣味：観察

特技：とくにない

好きなもの：面白い人

嫌いなもの：邪魔な人

## 登場人物（後書き）

こんな感じです。いかかだったでしょうか？

最初はこの3人合わせて7人登場させるつもりでしたが、さすがに多いと思いついてこの3人だけにしました。

でも気分で登場させちゃうかもしれません^^；

ちなみにテオスはギリシャ語で『神』といいます。

とまあ更新は亀更新となること間違いなしかと思いますがどうぞよろしく願います！！

## 第1話 プロローグ（前書き）

左月が転生したときのお話です。

## 第1話 プロローグ

「・・・疲れた・・・」

初めまして。自分の名前は花村左月。

今はある仕事の休憩中の時間をつかい、コンビニから今日の昼食を買い、いま仕事場に戻ろうとしている所だ。

一応高校生。いまは春休み中だから仕事がほぼ1日中で、正直ものすごく疲れている。

「・・・仕事場に戻ってご飯食べたら、少し寝かせてもらおう・・・」

そんな感じの1人ごとを言いつつ、信号の前につく。そして青になるのを待つ。

この信号をわたっていけば仕事場はもうすぐの所にある。

まっすぐ見ていると自分の高校ではないが、高校生の男子が自分と同じように信号が青になるのをまっていた。

音楽を聴いているのか、ヘッドフォンをしていた。

もう他の高校では春休みが終わったのかな？それにしてもなんの音楽を聴いているんだろう？

音楽には小さい頃から興味があった。そんなことを思っているうちに信号が青に変わっていた。

早く戻ろう。寝る時間がへっちゃう・・・

そんなことを考えていたら・・・

「あぶないっ!!」  
「車がっ!!」

周りからそんな声が聞こえたそして前をみると  
いま前にいる高校生の男子に大型トラックが止まる気配もなくぶつ  
かろうとしている…

そしてその高校生は…

…音楽を聴いていてきずいていなかった…

あほかあああああ!!!!!!

って、つつこみをいれている場合じゃない!

大型トラックの運転手がブレーキをかけている

けど…もう遅いっ!

コンビニで買った物を落とし、無我夢中で走る。そして手を伸ばし  
て…

…間に合えっ！……！！……！！

おもいつきり押した。

よしっ！間に合った！

そう思った瞬間……

ドッ！

おもいきり大型トラックにぶつかった。

…そういえば、自分のことどうするか考えていなかったや…

「おいっ！大丈夫かつ！！」

「いっいま、救急車をつ！！」

「だれかつ！警察も呼んでくれ！！」

皆やさしいなあ……あの高校生の男子は大丈夫だったかな……？

……ああ……もう……ダメだ……

そして目を閉じた……



## 第1話 プロローグ（後書き）

次回、テオス・藤村奏汰が登場する予定です！

## 第2話 バカテスの世界へ！（前書き）

オリキャラ2人の登場です。

## 第2話 バカテスの世界へ！

ぱちりっ

目を覚ましました。花村左月です。

なぜに目が覚めてしまったんでしょうか？死んだと思ったのに……

…さっぱりだあw

なにもかも真っ白い空間にいるようです花村左月っ！

しかも立っている感覚ないし……うん。

「ここは地獄だな。」

「ちげえよ。」

「あゝはっ！？」

びっくりしたあ！！後ろからいきなり声をかけるなんて！変な声がでちゃったじゃないか！！

あゝはってwww

「…プッ…あっはははははは！！（大爆笑）」

「お前…変な驚き方するんだな……プッ…」

笑われたっ！！しかももう1人いたし！！

ていうか初対面なのになにこれめっちゃ恥ずかしい……

「えっとー…それで、ここはどこですか？」

「ははは…ああここは転生に必要な儀式を行う所だ。」

………はあい？

今この人『転生』って言ってたよね…？

「転生と言いますと…？」

「俺はテオスっていうんだ。よろしくな。」

無視されただとおおおおお！！なぜだ！なぜスルーするんだっ！！

「そして俺は藤村奏汰だ。」

君もかいっ！君もスルースキルを発動しちゃうのかいっ！？  
でも2人とも美形ですねえ……いやいやそうじゃなくて！！

「ええつとですね、ですから転生といえますと…?」

「俺達は死んだそうだ。んで、名前は？」

さらつと言ったよこの人…ん? 『俺達』?

「花村左月です。それで死んだのはわかりました。それで『俺達』とは…?」

「俺も死んだんだ。こいつのせいで…」

そして藤村君は先ほどのテオスと言う人に指をさしていた。

「いやゝ悪い悪い！巻き込んでごめんね左月！本当は奏汰だけだったんだけど、まさか左月も死ぬとは…」

藤村君だけって…藤村君は死ぬこと確定してたんだ…

「運命って残酷D A N E」

「神様のお前が言っなよ…」

ついていけないよう（泣）

「ちょっと説明をお願いします…。軽く付いていきません…。」

「いいぜ。俺はテオス。数ある世界を管理する神の1人だ。」

…てことは神って何人もいることになるね。てか、いちいち気にしているをつつこんじゃ駄目だ。そのまま流していこう。

「簡単に言うと本当はあそこで奏汰だけが死ぬはずだったんだ。だけど左月がそれを助けてしまった。奏汰達がいる世界の運命がこの事故だけで変わってしまったんだ。1つの運命を変えるだけでその世界が大変なことになりうるからね。だから悪かったと思ったんだけど、奏汰にその場で話してここにきてもらんだ。」

「最初は意味不明だったけどな。正直いやだったけど、屋上から飛び降りてきた。」

へ… ……なんか複雑だ。自分のせいで世界がなんちゃらかんちゃらってことになっているのか… ……助けないほうがよかったのかな？

「ってなわけで、さっきはありがとな。助けてくれて。っていつてもすぐに自殺したけどな。」

「… ……いえいえ。なんかごめんなさい。自分の行動が世界の運命を変えることになろうとはおもいませんでした…」

「まあ、あのまま奏汰がいたら結構大変なことになっていたからねえ… ……最悪、その世界が無くなるほどだったし… ……」

そんなにっ！？なんで人助けしただけなのっ！！（泣）

「まあ気にしないで。次は『転生』について！」

「これについては聞いていないんだよな……」

藤村君も聞いていないのか……どんな世界だろう……

「ずばり！『バカとテストと召喚獣』という世界にってもらいま  
s…ごほおー！」

藤村君の回し蹴りがお腹にさくれっ！！

これは痛そうだ！！でもなんで蹴るんだろう？

「いやいやいや…なぜ小説の世界なんだ？」

小説っ！？小説の世界だとっ！？実に楽しみだ！！面白そう！！

「…なんですか？それ？」

「俺も最近友達に薦められたから読んでいるんだが…たしか1人の  
バカが2人の美少女に好意をいだかれていて…そのバカが鈍感で…  
変態で………スマン説明するの苦手なんだ………」

なんだか面白そうだな…生きているうちに読みたかったなあ…

そこでテオス君が起き上がった。お腹抱えているし本当に痛そうだな…

「イテテ…質問に答えるよ。それはパラレルワールドが無限に近いほどあるから…かな？」

パラレルワールド？たしか…パラレルが平行。ワールドが世界。…さっぱりだ。

「パラレルワールドは…複数ある平行な世界…って感じか？」

…やっぱりそんな感じか。てかさりげに心読まれなかった？

「そのパラレルワールドが数多くある世界がこの『バカとテストと召喚獣』なんだ。まあそのなかで1番安全というのもあるけど…」

安全かあ…他の所は危険なのかな？

「運命を変えられる人なんてはじめてだよ。だから何をやっても大丈夫そうな世界を選びました！それに俺は左月と奏汰の監視もしないといけないから、そこんところよろしく！」

「へ？俺も？」

なんかまたさりげに心読まれたし、なんか危険人物っぽい人になっ

ているし……  
さんざんだなあ……うん

「念のためだよ。そんじや転生！いくよっ！！」

パ  
ア  
ア  
ア  
ア  
ア  
ア  
！！

足元に魔方阵が浮かび上がってきた。

なんかかつこいいじゃん！！

このままワープするのかな？うわああかつこいい！！

「示 Σ ε λ ε ω φ ? ρ ο υ ? ν ? ο π ρ ? σ ω π ο .  
」

なんて言っているんだ？けどかつこいい！！！！  
ヤバスヤバス！なんかこれからが楽しみで仕方がないよ！

「Τ ? ρ α , ε δ ? !  
」

ぽんっ！

「「えっ？」「

今の状況を簡単に説明すると………うん。

足元にでっかい穴ができていた。

そして当然落ちていくわけでした……

「そんじゃまた、そっちの世界でね」

「うわあああああああああ！……！！！！！」

笑顔で送るテオス。さつきはかつこよかったのになあ……

「覚えてろよおおおお！！テエエエオオオオスウウウウ！！！」

隣で一緒に落ちていく藤村君。そんなことを叫んでいた。

……そしてここで意識が途切れた。

## 第2話 バカテスの世界へ！（後書き）

いやゝグダグダですね。ごめんなさい。

左月の心の中ははっ茶けている感じでプラス思考です。  
外側は落ち着いている感じの人に見えますが…

左月はこんな感じでいかせていただきます。

第3話 ここに住むのかあ…（前書き）

3話目ですね。グダグダですが、どうぞ。

### 第3話 ここに住むのかぁ…

ぱちりっ

なんだかデジャヴな感じがした。花村左月です。  
今いるの所は……普通に綺麗な部屋ですね。うん。  
立ち上がって部屋をでていくと……

「……………」

すごく広いリビングがあった。  
なんかでっかいソファーに、凄く綺麗なキッチン。テレビとか、テーブルとかエアコンとかとまあいろいろ…ベランダもお風呂もでかいし、ほとんどなんでもそろっていた……ここはどこ的高级ホテルだ？そしてなぜこんな所に……うん。

「これは夢だな。」

「違うよ。」

「Why!？」

うつわーびっくりしたなあ。また変な声が出ちゃったじゃないか!!  
デジャヴではないっ!!……………多分……………

「今度は英語か！面白いね」（笑）

「……英語は得意ので……」

比較的ね。他にも、フランス語、ポルトガル語、ギリシャ語、ドイツ語、その他もろもろ外国語の読み書きが出来るよ！これは自慢したいことでもあるっ！  
ところで一つ気になることが…

「あの……さっき一緒にいた人は……？」

「ああ奏汰ね！それな」 「テエエオオオスウウ！！」 ぐはっ！！！！  
！！！！

決まったーーーー！！！！藤村君のとび蹴りがテオスの顔面にちよくげき だああああ！！！！いやしかし綺麗に吹っ飛ばされていますテオスさん。さすがといったところか……

「ちよっ…顔面はさすがにちよっと…」

「文句を言うならさらにハイキックを……」

「いえ文句もなんにもございません。」

すごいぞテオスさん！！すばやく土下座をしている君はまさにかっこいいよ！！！！命がある意味危険にさらされているもんね！あたりまえの行為だよ！！！！しかし強いな藤村君。敵にまわしたくないね。

こつちも危険になるわけだし…てかいいのか神よ。神が普通の高校生に土下座しているなんてある意味レアな映像だよ…

「ていうかよくここにいとわかつたね…奏汰は1階下の部屋なのに…」

「邪悪な気配を感じたから（´ー＊、）キラーン」

「Σ（□、；）！！俺神んだけど！！邪悪とか無いんだけど！！」

顔文字いい！？いいのかコレ……（＊、□、＊、；

「えつとですね……コホン…えーつと説明始めるよ？ここは君たちの住むところね。そして君たちはいまから文月学園と言うところに行ってもらって、振り分け試験を受けてもらうよ。はい、制服用意したから着替えてね、時間ないんで。」

さらつと言ってさらつと渡されたっ！？文月学園？振り分け試験？そんなのあったけ？あれ？

「一番最初のところかよ……まいつか。そんじゃ左月、着替えたらずぐに外行くぞー。マンシヨンの前でまってるからんじや。」

振り分け……試験……？は？嘘だろおい、これから試験！？勉強もなんもしてないよ！！！！あーどうしよう。自信がない………うん…

あれ？いつの間にか藤村君がいない…

「……あれ？あの人は……？」

「ん？奏汰ならもう準備してるよー。ほらほら左月も早く早く」  
「本当ですか？それじゃあ急がないと……」

自分の部屋に行き渡された制服を確認してみた……あれ？

……これってまさか……そういえば仕事していたときのまんまか……  
声も戻していなかったし……

おおー！なんか面白そうだな……このまま隠しておくか♪さてと、  
着替えないと……

着替え中……

よっし準備万端だっ！……長袖というと冬服だね。夏服はどんな感じだろう……

「おおー！サイズ大丈夫そうだね！」

「はい。ありがとうございます。それでは行きましょうか……」  
「ん？…あっそうか。場所がわからないよね！案内するよ。」

敬語って使い慣れているけど、けっこうめんどくさいな……でも、  
普通他人の人にはこうやって話せ！って言われているし……しかた  
ないか…外にでて鍵をかける。そして振り返ると……

「あの～ここ何階ですか？」

「ん？16階だよ。」

高っ！……！！……！！……高い！！……こんなに高いところにいるのは初め  
てかもしれない……

「ちなみに、ここは一階につき一つしか部屋がないから。贅沢だよ  
ね。」

……僕はここに住んでいいのでしょうか？お金はどうしよう……

「お金とか………どうしたらいいのでしょうか？」

「ああ、そういうのは責任として俺がやることになっているんで。  
特に心配はいらないよ。」

「そ……そうですか。」

僕は遠慮なんてしないからな。まあ神様だから大丈夫か。そうこう話しているうちに、エレベーターの前につき、のった。やっぱりコレで行くんだ…。こんなところで住むの初めてだし…大丈夫…かな？

そして僕達は一階についた。そこで、藤村君と会った。

「よー。意外と遅かったな。」

「少し話をしていたんです。お金のこととか…」

「そういうのは、テオスに全て任せればいいんだよ。ついでに掃除とか、買い物とか、洗濯とか全部。」

「ねえ、なんか俺だけ扱いひどくない？」

「下僕だもんな。」

「ヒドッ！！それひどくない！？」

藤村君すごい。神様にあそこまでいえるなんて…大丈夫なのかな？まあそういういつ僕達はその文月学園という所にむかっている。しかし仲いいこの2人。

「冗談だ。真に受けるな。」

「奏汰が言つと冗談には聞こえない。」

「あ、それ僕も同感です。」

「……………」

藤村君は真顔で言っても、笑顔で言っても、冗談には聞こえないと思うんだよね。なんていっても普通にクールな感じがするしね。

「…あのさあ、左月。」

「はい。なんでしょう?」

「その喋り方、やめてくれねえか?」

「……喋り方…と、言いますと?」

……なんかしたかな僕。しかもテオスまでうんうんと頷いているし。  
……うん?

「…その敬語だよ!なんかかたつくるしいって言うか…なんかいやなんだよ。」

「わかるよ奏汰。これから仲良くしていくんだもん。もっと素直になつてほしいよね…」

「素直に…と言われましても…うん…」

ちっちゃいころから、敬語しか話していなかったかも。仕事るときは別だったけど…悩むな……

「てか、俺達はもう友達だ。だからそんなに気をつかうな。ていうかお願いだ。」

「俺からもな。左月はなんか頭ではいろいろと考えていそうだしね。」

ギクリッ!頭ではツツコミやらいろいろと素直だけど……なんかい

ざというときに素直になると……ちょっとね……

「えっと……本当に……いいんですか……？」

そつと聞いてみる。怖いんだよね。素直になるのが……

「だから、いいんだよ。友達だし……あと、奏汰って呼んでくれ。」  
「それにあたりまえだよ？俺はテオスで！」

……友達……ね。初めて言われた……かな？……よしっ！信じてみようか！

「……………それじゃあ改めまして……よろしくね！奏汰！テオス！」  
「おう、よろしくな左月！」  
「こちらこそ。だね！左月！」

この2人は大丈夫だ。……信じられる……うん。

「うん。話しているうちに文月学園が近くなってきたね！」  
「おっ！もうか！」  
「なんか楽しみだなあ。」

いやあゝしかし楽しみだ！友達できたし！うん……………？なんか忘れてるような…？

「それじゃ、俺はこれで。」

「え？どうして？」

「俺は神だからね。他人に見られるとまずい。」

「そつえばそうだったな。」

「それじゃあいつそのことテオスも文月学園に…………」

「だから他人に見られるとまずいんだよ！！それじゃ、俺は戻るわ。」

「天界…か？」

「まあ、そんなところかな。そんじゃ、人気のないところで名前を呼んでね？そしたら出てこられると思うから。それじゃまたね！左月！奏汰！」

そしてテオスはいなくなった。一瞬で。かつこいいいい！！！！！！  
！なんかやってみたい！！

「まあありがちな。行くぞ左月。もうすぐだ…。」

「あ、うん。そうだね。」

そしてしばらく歩いていると、校門が見えてきた。あそこが文月学園か……。でかいな……。私立かな…？

「そつえば…左月は試験大丈夫か？俺はいきなりだから少し自信

ないんだが……」

「……試験？」

「振り分け試験だ。このテストでクラスが決まるみたいだ。」

そ……そうだったあああああああ！！！！！！！！！！

！！！！！！

すっかり忘れてたあああああ！！！！てかクラス決まるの！  
？聞いていないんだけど！！

「正直に言おう。まったく自信なんてない。」

「そうか？左月は……っていうか小説とかはイレギュラーはすごいやつばっかだし……嘘じゃねえのか？」

「まあ……小説とかはそんな感じだよな……すごい奴ばかり。ていうかさ、奏汰は？前の高校ではテストどうだったの？5教科総合で。」

「そうだな……たしか…合計489点ぐらいだったか…ってどうしたんだ左月？なんかものすごく絶望的な顔をしているようにみえるんだか……」

ここにすぐ頭のいい人がいるんだけどどうしよう……。100点満点だよね…？

「……まあ僕もできるだけ、がんばりましようかね……」

「いちおう聞いておくけど……お前の5教科総合点数は……？」

あれ聞いちゃう？フツ…………後悔しないでね奏汰…

「…………129点…………」

「…………は？」

まあそれが当たり前の反応だろうね。1教科100点満点の5教科総合点数が129点って……

「…………それ…本当に5教科総合か？」

「yes…………」

「…………それって…やばくね？…」

「うん…そうだね…やばいね…」

明後日のほうこうをむいて話す僕。それに今回は突然だったから勉強していないし……………なんか0点の予感がする。そんな感じの話をしていると校門前についた。結構遠いな。疲れたんだけど……………そしてそのまま学校に入り僕は職員室を探した。一階にあったため、すぐに見つかった。そしてはいる。

「失礼します。」「」

そいつって入ったのはいいんだけど……………誰に話せば……………

「お前らが転校生だな。」「」

なんか体がものすごくこつい先生に話しかけられた。なんだかんだで話は通っているみたいだ。しかすっごい人だな……こんな人は初めてみたよ……

「俺は補修授業担当の西村宗一だ。」

「俺は藤村奏汰です。よろしくお願いします。」

「僕は花村左月です。よろしくお願いします。」

奏汰が敬語で話すの初めて聞いた気がする。僕もつられて挨拶をした。

「お前達は転校生と言うことで空き教室で試験を行う。ついてこい。」

僕達は先生についていった。みたところ綺麗な校舎だな……。そして空き教室に着き、席に着いた。

「それでは試験を開始する。不正行為などは慎むように。それでは、始め！」

確実に……終わったな……

こうして振り分け試験が始まった……

第3話 ここに住むのかぁ…（後書き）

西村宗一であってますかね？バカテスってまだ6・5巻までしか持っていないので……名前が出ていてもなんか忘れていそうなんですよね……

次でやっとバカテス1巻のところですよ！

バカテスト!! (前書き)

バカテストは5問ずつ出していることと思います! ちなみにオリキヤラ達だけです…。

## バカテスト!!

化学 第1問 問 以下の問いに答えなさい。

『調理の為に火をかける鍋に製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つあげなさい』

藤村奏汰の答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為、危険であるという点。』

合金の例……ステンレス』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っかけ問題だったのですが、藤村君は勉強が出来るほうみたいですね。おみごとです。

テオスのコメント

意外と頭いいんだね！

花村左月の答え

『問題点……家が消える』

教師のコメント

大惨事ですね。

テオスのコメント

あながち間違っていないと思うよ。

国語 第2問 問 以下の意味を持つことわざを答えなさい。

『(1)得意な事でも失敗してしまう事』

『(2)悪いことがあつた上に更に悪いことが起きる喩え』

藤村奏汰の答え

『(1)弘法も筆の誤り』

『(2)泣きつ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にも(1)なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、(2)なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがありますね。

花村左月の答え

『(1)かっぱが落ちる』

『(2)けつたり殴ったり』

教師のコメント

ひどい光景ですね。

テオスのコメント

なんとなくで覚えていることを書くとした努力は伝わったよ。

英語 第3問 問 以下の英文を訳しなさい。

『This is the bookshelf that my grandmother had used regularly.』

藤村奏汰の答え

これは私の祖母が愛用していた本棚です。

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

テオスのコメント

奏汰って英語苦手なほうじゃなかったっけ？

花村左月の答え

これは私の祖母が定期的に使用していた本棚です。

教師のコメント

正解です。花村君は英語が得意みたいですね。

テオスのコメント

意外……

数学 第4問 問 以下の問いに答えなさい

『(1)  $4 \sin X + 3 \cos 3X = 2$  の方程式を見だし、かつ第一象限に存在する  $X$  の値を一つ答えなさい。

(2)  $\sin(A+B)$  を等しい式を示すのは次のどれか、?  
? ?の中から選びなさい。

$$? \sin A + \cos B \quad ? \sin A - \cos B$$

$$? \sin A \cos B \quad ? \sin A \cos B + \cos A \sin$$

B  
『

藤村奏汰の答え

$$『(1) X = \pi / 6$$

$$(2) ? \quad 『$$

教師のコメント

そうですね。角度を『 $^{\circ}$ 』ではなく『 $\pi$ 』で書いてありますし、完璧です。

テオスのコメント

これ、グラフを使って解くと大変なことにめんどくさいよ。

花村左月の答え

$$『(1) X = 12345 \quad 『$$

教師のコメント

なにをどうしたらそんな答えが出てくるんですか?

テオスのコメント

順番に書いたただけだね。てか、適当?

物理 第5問 問 以下の文章の（ ）に正しい言葉を入れな  
さい。

『光は波であつて、（ ）である』

藤村奏汰の答え

『粒子』

教師のコメント  
よくできました。

テオスのコメント  
まあ奏汰ならできるか。

花村左月の答え  
『光波』

教師のコメント  
あわせるものではありません。

テオスのコメント  
なんという……





オマケ←

テオス「はい！どうも！今から始めました。〇ぜ？〇ぜ？〇ーぜ  
！！」先生のテオスですみなさんヨロシク！第1回目は『算数』で  
す！みなさんと一緒に答えてくれるのは…左月と奏汰のお2人で  
す！！！」

左月「……いいの？…コレ……」

奏汰「さあ？てか、俺ら高校生なんだが…」

テオス「そして俺のアシスタントをしてくれるのがコk……」

左月「いやだめでしょそれ！ここは『バカテス』だよ！？てかどうしているの！？」

テオス「別世界からもってきた（キラーン）」

左月「そうというのは是非ともやめてほしいんだけど……」

テオス「そんじゃ1問目。奏汰 $3 \times 4$ は？」

奏汰「12だろ……」

テオス「正解~~~~~！！！！すごいね奏汰さすがだね！頭いいよね〜天才って呼んでいい？」

奏汰「呼んだらてめえにハイキックかます。」

テオス「そんじゃ、次の問題いつてみよー！」

奏汰「なんでお前そんなにテンション高えんだよ……」

テオス「んじゃ2問目。左月 $23 - 15$ は？」

左月「じゅ「違います。」

テオス「こんな問題も判らないなんて人としてマズイよ死んだほうがいいよむしろ死ぬ。」

左月「ちよつと間違えただけでひどくない！！？てかテオスってそんなキャラだったっけ！？僕の心がBroken heartだよ！？」

奏汰「間違えたお前が悪い。」

左月「……でも、あれはひどいでしょう……」

テオス「そんじゃ、バカな左月のために判りやすく説明してあげるね。」

左月「バカは認める。」

奏汰「言つて悲しくないか？」

テオス「まず、コク。を23匹用意する。（うじゃ）」

左月「…イイノカナー…」

奏汰「気色悪ッ！！」

テオス「うち15匹を……」

殺す。」

(ドカツ、バキッ、ザシユツ、ドチツ、ギヤー、あはは……)

左月「……そ……奏汰！？テオスがキャラ崩壊しているよっ！？ヤバイよ止めてよ！！」

奏汰「別にいいんじゃない？ つかどうでもいい。」

左月「奏汰あ！？」

テオス「…フウ…さてっ！！（返り血たっぷり）…

残りは何匹かな左月つ？（ケタケタケタ）

左月「グロイよ!!!!!!!!!!!!!!」

は……8匹……ですっ！！！！（ガクブル）」

テオス「はい、正解ー！」

さて、このバカも理解したところでお別れの時間となっちやいました…

それじゃあ！次回をお楽しみに！さよーならー！！」

左月「あんなテオス…初めてみた…（ガクブル）」

奏汰「……今日は徹夜で勉強だな左月……」

## バカテスト!! (後書き)

誤字があつたらスルースキルを発動しよう!

特に、『テオス』と『テウス』をよく間違えてしまうので、きおつけてください!

オマケのやつ、なんか見たことがあるなあって言う人!!

大正解でございます。

## 第4話 やっぱりFクラスか…（前書き）

はい、駄文です！駄文でも読んでくれるとうれしいです。

## 第4話 やっぱりFクラスか…

振り分け試験が終わり……

1週間後、僕達は文月学園に向かっていた。  
まさかテストでクラスが決まるとは……なんかちょっと楽しみ。

「ねえ、僕達一緒のクラスになれるかなあ？」

「無理だろ。」

「ええ！？どうして？」

「俺は結構自信があるんだ。少なくとも、Fクラスではない。」

それって僕がFクラスだということ！？

まあ…否定はしないけど…

「それじゃあ、奏汰は何クラスかな？」

「…さあ… Aクラスにいきたいんだが… BかC… くらいか？」

僕には程遠い。同じクラスになる可能性はないな。うん。  
お？校門が見えてきた！

「はあ… 大丈夫かな？学校での生活…」

「まあ… なんとかなるだろ…」

そして、校門前にあるとき振り分け試験のときにあった西村先生がいた。

よく働くな……。――

「藤村に花村。来たか。遅刻ギリギリだぞ。」

「すみません。ちょっと寝坊してしまいました……」

「次からは気をつけるように。受け取れ。」

なんか箱から取り出し、僕達に渡してくる。

僕のところには『花村左月』、奏汰のところには『藤村奏汰』と大きく書かれている封筒を渡された。どうやらこれにこれからの僕のクラスが書かれているみたいだ。

「……それにしても、僕こんなやり方でクラスを発表する高校なんて聞いたことがありませんよ。」

「ウチは世界的にも注目されている最先端システムを導入した試験校だから、こういったやり方も、その一環ってやつだ。」

「……お疲れ様です……」

僕はなんかすごい高校に来てしまったみたいだ。

さて封筒を開けてみようか……。

「……俺はAクラスみたいだ。」

「おお！さすが奏汰だね！さて……僕のは……」

『花村左月……Fクラス』

ですよねえ！。

「花村、英語だけはがんばってたが他の教科はすべて20点以下だったぞ。」

「……左月、今日徹夜な。」

ええ！ばらしちゃうんだ先生！

しかも今日は徹夜って…昨日もそうだったのに…

「しかも、0点の教科もあったぞ。放課後、補習だからな。」

「あ、それ俺も受けます。」

あーあ。あつたんだ0点。多分古典だな……あーあ。  
奏汰も優しいな。補習を受けてくれるなんて…

「それでは行きます。失礼します先生。」

「失礼します。」

「がんばれよ。特に花村は。」

そして僕は教室に向かった。

「お！ここがAクラスだな。……しかし、すごいなこれ。」

目の前には豪華な扉があった。しかもなかを覗くと…  
プラズマディスプレイに先生の名前が表示されていた。これって、  
自己紹介の途中じゃあ…

「奏汰…大丈夫？」

「…入りにくいな…」

そして周りも見てみる…ノートパソコン、個人エアコン、冷蔵庫、  
リクライニングシート…  
…ここはどここの高級ホテルですか？

「……そんじゃいくわ…お前もがんばれよ、左月。」

「うん。そっちもがんばれ、奏汰。」

そして奏汰がAクラスの教室に入っていく。  
……僕もいくかFクラスに…

「……これはさすがにひどすぎでしょう…」

僕の目の前にあるのはさつきと違ってボロボロの教室があった。  
どうやらここがFクラスらしい……ものすごい格差社会だ。これが  
この学校の方針なのかな…

……なんか遅刻ギリギリだから入った瞬間罵倒されそうだなあ……  
まあいつか。  
そして教室に入ると……

「しつれいしま〜s……」  
「早く座れこのうじ虫野郎。」

本当に言われるとは思わなかったよ……。

**第4話 やっぱりFクラスか…（後書き）**

やっとFクラスの所までいけました……

次回は自己紹介でしょうかね…

## 第5話 自己紹介（前書き）

はい駄文！↑いつもいつているような…

## 第5話 自己紹介

「聞こえないのk……って…」

新しいクラスの教室に入りすぐに罵倒されました。花村左月です。知らない人にいきなりうじ虫野郎はどうかと思う。

どうやら赤毛の人は正面を向いたままうじ虫野郎と言ったみたいで…それで今こっちに向いて僕存在に気づいたみたいです。

「えっと…スマン。明久のやろーかと…」

僕は無言で席につきます。1番後ろの席で出入り口が1番近いところ。

どうやら席は自由らしい。そしてそのあと……

「すみません、ちょっと遅れちゃいました」

「早く座りやがれ本物のウジ虫野郎が!!」

どうやらあの人が明久と言う人らしい。あのひとも入ってすぐに罵倒されたよ可愛そうに…

……っていつか昨日寝不足で眠い……まあ、寝ているふりをして話を聞こう。

「……雄二、何やってんの？」

「……明久、お前のせいだからな。」

「ええ！？いきなりなに！僕がなにをしたって言うの！？」

どうやらさっきのことらしい。今日はあの雄二っていう人をさせてみよう。

罵倒されたし……いいよね？

「……それと、席についてもらえますか？HRを始めますので」

考え事をしていたら先生がきたみたいだ。僕は体をおこして話を聞く体制に入る。

しかし眠い……途中で眠らないようにしないと……

「えー、おはようございます。二年Fクラス担任の福原慎です。よろしくおねがいします。」

先生は黒板に名前を書こうとして、やめた。どうしたんだろう……チョークがないの！？せめてチョークは用意しようよ……

そして設備について話をした先生。必要なものはなるべく自分で用意しろとのこと。

なんというクラスだFクラス。

「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね。廊下側のひとからお願います。」

廊下側って……僕その1番後ろなんだけど……生徒が1人立ち上がって自己紹介を始める。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

なんかすごく特徴があつて覚えやすい人だ。しかしこの人……女？  
いやでも、男性用の制服を着ているから、男……のはず。

「ちなみにいっておくが、ワシは女ではなく男なのじゃ。そこらへんは間違えないようにしてもらいたい。」

『『嘘だっ！……！』』

……なんとノリのいいクラスなんだ！気に入ったよこのクラス！  
僕も頑張つてこのクラスのみんなにあわせてみよう。

「……………土屋康太」

口数が少ないな。小柄で運動神経もよさそうだな……。

あ、終わり？自己紹介コレで終わりなの土屋くん？

「島田美波です。海外育ちで、日本語は会話はできるけど読み書きが苦手です」

海外か……。実は僕もアメリカで育つてこっちに來たんだよね……  
島田さんとは仲良くなりたいなあ……

「あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は…」  
ドイツか、それじゃあドイツ語で話しかけてみようかな…  
それで、趣味とは…

「趣味は吉井明久を殴ることです」

危ない。この人は危ないな。あ、でもその吉井明久って人だけだからいつか。  
ってあれ？明久って人はたしか…

「はろはろー」

「……あう。島田さん」

「吉井、今年もよろしくね」

あの可愛そうなひとだったのか吉井って。

まあ僕にも機会があったら殴らせてもらおう。僕の趣味にもなるかも…

さてその次はその可愛そうな人こと吉井明久君だ。

「…コホン。えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んでくださいね♪」

のった！

『『ダアアーーリイーーン！！』』

ちなみに僕も参加してもらった。いやーやっぱりいいねこのクラス！最高だね！みんなとは仲良くなれそうだ！

「…失礼。忘れてください。とにかくよろしくお願いします。」

作り笑いでごまかしていた。普通そうだよ〜  
野太い声の大合唱みたいな感じだったし……

「あの、遅れて、すいま、せん……」  
『えっ？』

ここで1人の少女が入ってきた。しかもすごくかわいい。  
あれはモテるだろうな。しかしなんでみんな驚いているんだろう…？

「ちょうどよかったです。自己紹介をしているところでしたので姫路さんもお願ひします」

「は、はい！あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願いします…」  
「」

ペコリと頭を下げた姫路さん。このクラスの華って感じかな？

「はいっ！質問です！」

「あ、は、はいっ！なんですか？」

「なんでここにいますか？」

僕にはこの質問の意味がわからない。

もしかしてこの姫路さんって人は、本当は頭がいいんじゃない…

「そ、その……振り分け試験の最中、高熱をだしてしまつて……」

この答えにみんなは『ああ、なるほど』と頷いていた。

どうやら本当に頭がいい人みたいだ。これは災難だったね姫路さん…  
そしてなぜかみんなが言い訳を始める…

『そついえば俺も熱……がでたせいでFクラスに』

『ああ。化学だろ？あれは難しかったな』

『俺は弟が事故に遭つたと聞いて実力を出し切れなくて』

『だまれ一人っ子』

『前の晩、彼女が寝かせてくれなくて』

『今年1番の大嘘をありがとう』

ここは予想以上に面白いクラスだ。僕も頑張らなくては……

「で、ではっ、一年間よろしく願いしますっ！」

そして逃げていくように席に着く。緊張していたみたいだ、安堵の息を吐いていた。

まあ、ああいうのが女の子なんだろうなあ…まあいつか。

なんかこの順番だと僕の自己紹介は最後らへんになる。

それまで少し寝ようk…

バキィッ バラバラバラ……

……本当にひどいなこのクラスの設備……

「え……替えを用意してきます。少し待っていてください」

そして先生は替えをとり教室を出て行った……

まあこれからのことを考えると………実に面白そうだ。

……よし、今のうち寝よう………

そして僕は眠りに落ちた……

## 第5話 自己紹介（後書き）

花村君のの自己紹介はまた次回ということになりますね！

…だれか私に文力をください…orz

## 第6話 僕は意外と根に持つタイプ（前書き）

これは…左月の自己紹介だけですかね…

## 第6話 僕は意外と根に持つタイプ

……僕は今……何をしている？

……ああ、これは前の世界にいたころの……

あのときは本当に……

寂しかったし

苦しかったし

痛かったし

その頃の僕はなにもかも絶望していた……  
いや……

自らを拒絶していたんだ



「……………だ…さい…は…むら…」

…？あれ？僕は何を…

…そうだ寝ていたんだっけ？

…しかし懐かしい夢をみた…ような…

「おきてください。花村君。」

「……………はい…」

どうやら先生ががんばって僕を起こしてくれていたようだ。  
みんなの視線が僕に集まっている。  
それはそれで緊張するんだけど……

「起きましたか花村君。それでは自己紹介してください。」  
「…あつ、はい。」

どうやら僕が最後……なのかな？

僕は黒板の前にいき、自己紹介をする。

ん……そういえば…僕、うじ虫って言われたんだよね…

「えーっと…初めまして。初めてこの教室に入ったとたんうじ虫って言われちゃいました花村左月と言います。」

僕は根に持つタイプです♪

そしてそれを言った張本人はなぜかとビクッしていた。

いやー面白いなあ こういうのってSとはいわないよね…？

「転校してきたばかりなのでまだこの学校のことは少し教えてもらったくらいでそんなには知りません。教えてくれるとうれしいです。と言うわけで、今年1年間どうぞよろしくお願いします。」

礼儀正しくできた…かな？

嘘はなにひとつ言っていないし敬語も使っていた。

大丈夫…だよな？

みんなに頭をさげて自分の席につく。

みんなやたらとこっちをみてる。転校生ってそんなに気になることなのかな？

「さっき花村君もいっていたとおり、花村君は転校してきたばかりです。皆さん仲良くしてあげてください。」

先生がそんなことをいつてくれた。やさしいなあ…この人が担任でよかったよ。

まああと、奏汰に試召戦争のことと召喚獣のことだけ教えてもらったんだけど…

僕は戦力になりそうにないかなあ……

「はいそれでは坂本君、君が自己紹介最後の一人ですよ。」  
「…了解」

先生にそういわれて立つ坂本君。  
まだのこつていたんだあの人が……  
まあとりあえず聞こう……

「坂本君はFクラスの代表でしたよね？」

そして頷く坂本君。代表つてたしか……  
試召戦争でその人が負けたらそのクラスが敗北になるんだっけ？  
なんか……エライ人だったのかぁ……最初学級委員みたいなものかと思  
っちゃったよ……  
そして話し出す坂本君。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも好きな  
ように呼んでくれ。」

たしか代表つてこのクラスの1番成績がいい人がなれるんだよね……  
坂本君つて結構頭いいのかな？いやでも、Fクラスだから結構悪い  
のかな？

「さて、皆に一つ聞きたい…… Aクラスは冷暖房完備の上、座席  
はリクライニングシートらしいが……」

僕も見ただすごかったよねあれは。高級ホテルのロビーみたいな  
かんじ？

そして坂本君は静かにみんなに告げる。

「……不満はないか？」

『大ありじゃあああああ！！』

うおっ！？ビックリした！これが魂の叫びってやつ？

くっそう！ついていけなかった…orz

ざわざわっとみんながいろんな意見を言っていた。

少ししか聞こえなかったけど、みんなの意見はごもつともだ。

この設備はひどすぎる！とか、Aクラスも同じ学費だろ？とか…

「みんなの意見はもつともだ。そこで…これは代表としての提案だが…」

坂本君は自信満々な笑顔でみんなにこう告げた。

「……FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う。」

…面白そうだけど……本気？



## 第6話 僕は意外と根に持つタイプ（後書き）

ちよいつとシリアスはいりましたね。

はい、ちよいつといつもより短いです。

きりのいいところで終わるとしたらここしかないかったんですよ…

文力がほしい今日このごろ

## 第7話 試召戦争！（前書き）

はい戦争です！最初らへんはほとんど飛ばしていると思いますけど  
：

## 第7話 試召戦争！

「…先生、ここに書いてあるすべての問題がわかりません。」  
「自力で解け。」

ひどっ！あなた教育者ですよ！

そんなこんなで補習中の花村左月です。

坂本君がクラスの士気をあげて（手始めに？）Dクラスに戦線布告しました。

そして試召戦争が始まり僕は見事……

化学

Dクラス 鈴木一郎 92点

V S

Fクラス 花村左月 6点

瞬殺ですねわかります。

いやー熱の問題難しかったもんね。あれはなにがなんだかわからなかったもん。

…今思うけど僕よく高校はいれたなあ……

…このあとも補習があるんだよねー…思った以上にきびしいぞこれ…  
僕は補習でできたプリントとにらめっこしていると…

ピンポンパンポン《連絡します》

誰の声だ？でもいまは試召戦争中だから…まさか  
Fクラスのだれかな？

《船越先生、船越先生、吉井明久君が体育館裏で待っています》

うん？あの可愛そうな人…あーめんどくさい…  
吉井君がどうかしたのだろうか？

《生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》

…かきね？なんだそりや？今日辞書ひいてみようか…  
そしてそれを聞いた西村先生は呆れたような顔をして頭をかかえて  
いた。

「先生？どうかしましたか？」  
「聞くな…」

？…船越先生ね…ちょっと調べてみようかな…  
すると…

『須川ああああああああつっ！！！』

そんな声が聞こえた。これは…吉井君かな？  
なんかよくわからないけど…ガンバツ！

そしてしばらくたち…

補習室にきた人がどんどん多くなってきた。

皆、ここまでよくがんばってこれたね…

ほとんどがFクラスのようにみえるけど…

そのあいだ僕はやっと1枚終わらせた…だけだった。

仕方が無いよ。これ化学だもん。僕の苦手教科の中にはいつているもん。あー…いまどうなっているか気になるし…多分このなかで1番長くいるのは僕だと思うから…逃げよう。

「先生！もういいでしょう！回復試験受けたいんで！」

「ん？そうか。花村は放課後も補習があるんだったな。それなら早く回復試験受けて来い。」

「……はい……」

そうだった放課後もあるんだった。

でもいつか。あんな感じの地獄ならなれているし。

はやく回復試験受けよー。僕は補習をしている教室を出た。そして回復試験をやっている教室を見つけて入った。

「…えーっと、回復試験受けます。科目は化学で。」

教室には女性の先生がいた。ばつりばりのキャリアウーマンみたいな…

この人はAクラスの教室にいた人だ。えーっと…そうだ、高橋先生だ！僕は適当に席にすわった。その高橋先生が化学のテスト用紙を渡してくれた。そして僕はその問題を解く。

…うんさっぱりだ。適当に答えを書き、そのまま先生に渡そうとする…

そのまえに隣の人が終わったみたいなのでその隣の人の採点を始める先生。

それを待っていると、隣の人に話しかけられた。

「あの…花村君…ですよネ？」

「…はい。そうですね…」

「あの…私、姫路瑞希っていいいます」

隣にいたのはあのFクラスの華。姫路さんだった。

僕は作戦とかは聞いていないからよくわからないけど…どうしてここに？

あとこれはテストだ。話していいのだろうか？

まあ、僕も書き終わったところだし…いいのかな？

「えーっと、どうして君がここに？」

「あっはい。あの私、振り分け試験では高熱がでて途中退席をしてしまったのでいま全教科の点数が0点なんです。」

「なるほど…」

それで回復試験を受けていたのか…それじゃあ、いままでこの姫路さんなしで戦争をしていたことになる。がんばっているなあFクラス。いままで姫路さんがいたからこそここまで保っているのかと思っただけど…どうやっているんだろう？まさかさっきの放送…？

話しているうちに採点が終わったんだろう。高橋先生がこっちに近づいてくる。…はい…

「採点、終わりましたよ姫路さん。」

「あっはい。ありがとうございます!」

「あ、それでは僕のも採点おねがいします。」

そしてテスト用紙を高橋先生に渡す。どうやら先生は僕がテストを終わらせていたことに気づいていたのだろう。まあ結果は一桁だからすぐに採点は終わると思うけど…  
それより…姫路さんが行こうとしない…

「あのー…行かないんですか?」

「はい。ちよつと花村君とお話がしたいので…」

「…僕に?」

なんだろう?僕はこのひととあつたばかりだ。別に話すことなんてないはず…

…僕なんか悪いことしたかなあ?なんかそんな感じの話しか思い浮かばない…

そんなことを考えていると先生がこっちにきた。やっぱりはい。

「はい花村君。採点終わりましたよ」

「あっはい。ありがとうございます」

「…なんか、はやいですね」

そりゃそうだ。僕10個ぐらいいしか回答書がなかったし。  
えーっと…2点か…うん。なるべく戦いは避けよう。

そして廊下にでる僕と姫路さん。  
姫路さんが僕に話しかけてくる。

「あの、それで花村君に言いたいことが…」

「……そういえばそうでしたねなんでしょうか？」

僕はなにもししていない！それだけは確かはず！

…まあ落ち着こう。落ち着いて話を聞こう…

「花村君は転校してきたばかりであんまりこの学校のことを知らないといっていましたよね？」

「…あゝ自己紹介のときですね。」

「それで、なんかわからないこととかあれば私に相談しに来てください。」

「……………はい？」

僕は拍子抜けしてしまった…それだけ？

「転校つて最初、仲良くできる友達とかいなくて…なんかさびしいじゃないですか。えーっと、それで、なにかできたらなーと…思いまして…」

……なんという……それだけで？…姫路さんがモテる理由がこれでわかった気がする。

このひと外見だけじゃなくて中身も綺麗なんだ。綺麗というか…純情？単純？天然？

ともかくものすごく優しい人間なんだ。…こんなにやさしい人はじめてみたかもしれない…

「ありがとうございます。それではわからないことがあつたら遠慮

なく聞いちゃいますけど…いいでしょうか？」

「あつ、はい！大丈夫ですよ！」

本当にやさしいひとだ。…ここにきてからはこんなことが多い気がする……本当はこんなのが普通なのかな…？……おっと今は戦争中だった。早くいかないと…

「それではいきましょうか。作戦とか言われていませんでしたか？」  
「っあ！そういえばそうでした！急ぎましょう花村君！」

そしてDクラスのもとへ急いだ…

そしてDクラスのもとへいったら…

「姫路さん、よろしくね」

という声が聞こえた。これは吉井君だろう。  
そして姫路さんは迷いもなくDクラスの代表であると思われる人に近づいていった…

「あ、あの…」

「え？あ、姫路さん。どうしたの？Aクラスはこの廊下は通らなかつたと思うけど」

Fクラスです。いまあなたの敵のFクラスです。そう心の中でつつこむ僕。

なにか申し訳なさそうな感じで姫路さんはいった。

「いえ、そうじゃなくて……Fクラスの姫路瑞希です。えっとよろしく願います」

「あ、こちらこそ」

「その……Dクラス平賀君に現代国語勝負を申し込みます」

「……はあ。どうも」

平賀君は今の状況を理解しているのだろうか。僕はそれが心配でたまらない。

まあ……気持ちもわからなくもないかな……

「あの、えっと……さ、試験召喚です」

## 現代国語

Fクラス 姫路瑞希 339点

VS

Dクラス 平賀源二 192点

「え？あれ？」

戸惑う平賀君。やっと気づいたみたいだ今の状況に。  
けど…姫路さんの召喚獣はすごく強そうだ。  
運が悪かったね…本当に。

「ご、ごめんなさいっ」

そして1撃でたおされる平賀君の召喚獣。

姫路さんが敵だったら僕は一瞬で終わるんだろうなあ…

そして戦いは終わった…

## 第7話 試召戦争！（後書き）

こんな感じのほうが読みやすいでしょうか？それとも

○○saidとかの方がいいでしょうか？

ちなみにいままではずっと左月saidで書いています！

## 第8話 テレパシーを覚えた！（前書き）

たぶん半分がテレパシーについての説明だと思っています。  
まあそこらへんはおきになさらずに…

## 第8話 テレパシーを覚えた！

Dクラス代表 平賀源二 討死

『うおおーっ！』

……僕は目の前でFクラスの勝利をみることになった……  
さて……もう……放課後か……放課後と言えば……

「試召戦争も終わったし、補習するぞ花村」

補習（地獄）の時間だぜ

西村先生行動力パネエ（笑）

試召戦争終わったとたんに来たよ……なんか怖い……

まあ……人間慣れが大切だ。この補習（地獄）にも慣れればいいだけのことだろう。

「……はい……わかりました……」

ちょっと遅れた返事をした。いや……いきなり人が現れるってなんか怖い……。

まあ表情には出ていないと思う……てか、でていないでほしい。  
そして僕は西村先生についていった。

そして補習をする教室にはいる僕。

そこには奏汰が熱心に英語の問題を解いていた。  
僕は悪いと思っただけ奏汰に声をかける。

「奏汰ー。いまきたよー」

「…おー。左月か…」

だるそうに答える奏汰。Aクラスになにか問題でもあったのだろうか？

そう思った僕は聞いてみる。

「…なにかあった？」

「……いろんな生徒に質問攻めにあわされただけだ…」

…僕にはそんなことなかったけど…まあ僕はラッキーってことかな？

「話さないでちゃんとやれよー」

おっと、ちゃんと補習受けるか……

はい……みごと真つ暗になった帰り道……

まさかこんな遅くまでやらされるとは……

奏汰はすぐに終わったけど……問題だったのは僕。

1問に30分くらいのペースで西村先生と奏汰が一緒になって僕に勉強を覚えてくれた。

もうちよつとつてところでわからないんだよね……そして明日もこいと言われて……

今は奏汰と帰っている。一緒のマンションだし……うん。

しかしこんな時間までよく付き合ってくれるよね……。ちよつと疑問だったりする……

よし、聞いてみよう。

「ねえー、なんでこんな時間まで付き合ってくれるの？」

「……んー？お前にいろいろ教えていたらいつの間にかこんな時間になっただけだよ……」

「……へー……」

確かに…そんなことは多いよね。僕もぶよ。よをしていたらいつのまにか朝から夜になっていたことなんてしょっちゅうだし……そんな感じのこととにているのかな？  
そう考えていると奏汰が話しかけてきた。

「…そういえば…今日の試召戦争、よく勝てたな」

「僕は出てすぐに補習だったけど…」

「そ…そうか…まあ、結果的に勝てたからよかったじゃないか」

「補習が終わって回復試験を受けたんだ。化学で。そしたらその点数が2点だったんだ…」

「……もう補習毎日受けにいけ」

「……うん」

まあ、目の前でFクラスの勝利を見たからよかったけどね。  
西村先生、これからもお世話になります…

「もちろん、俺も一緒に受けるからな」

「…ありがと…そして…よろしく」

「おう。がんばれよ」

「うん。できるかぎり努力する」

まさか勉強がここで役に立つとは思わなかったし…

しかも…前の学校の出席数…結構少ないし…

あー…あの仕事のせいだ……

…成績アップ…頑張ろう…

そ話しているうちに僕と奏汰が住んでいるマンションについた。

そして奏汰とわかれ、自分の部屋に入りでかいソファに思いっきりダイブした。

そして…

「…テオースー」

「……なにかな左月？」

「本当に来たよ……」

暇なのでテオスを呼ぶ。そして一瞬で僕の目の前にあらわれたテオス。

ちょっと本当にくるか確かめたかっただけなんだけど…  
すごいねうん。

「なに？呼んだだけ？そんじゃ俺もう行くけど…」

「あつちよつとまって！ちゃんと用はあるよ」

「うん？それじゃあ何かな？」

「えーつとですね…」

なんか…なんか面白いこと…そうだ！

「…なんかさ、テレパシーみたいなことできない？」

「テレパシー……ですか…」

神だからできるかなーって思ってたの提案。やっぱり無理かな？

できるよ？

「え？いきなりそうくる？」

テオスの声が頭に直接響いてきた。すごいわーやっぱり神様なんだねえー

それじゃあ僕もテオスになにかを……おい、テオースー！！……ん？

「……ちなみに、まだできるようにしていないよ？」

「それを先にいつてほしかったかな」

なんだよ！なんか恥ずかしいじゃんかよ！

「あはははっ！でもまあテレパシーは連絡するのに楽だね♪君たち転生者には特別にテレパシー能力をつけてあげるよ。それぐらいならなんの問題もないしね。」

「君たち……というと奏汰もだね。」

「うん。そっちのほうがなんか楽でしょ？」

携帯電話がいらなくなるね。それは確かに楽だ。

「それと俺がいちいち現れる必要ないしね」

「なにか面白いこととか、いざというときに呼ぶよ」

「わかった。そんじゃいくよー！」

「はい」

うーん…前みたいに穴に落ちるなんてないよね？

そしてテオスの指が僕の額にふれた。そしてこうつぶやいた。

「ΣK?ψει? . . .」

本当になんていつているんだ？僕にはさっぱりだ…  
そしてテオスの指がはなれた。

「…はい、終了！」

「…え？これだけ？」

「うん。これでOKだよー」

なにもなかったように感じたけど…  
それじゃ、またテオスになにかを…

「それじゃ、使い方を説明するね。」

「…？使い方なんてあるの？」

「ただ念じるだけじゃ意味が無いし、それだいつも思っていることが筒抜けになっちゃうよ？」

「た…確かに」

それじゃ読心術みたいなものか。読み取るのはいいいけど読み取られるのはちよつと…

「まずはじめに、テレパシー開始の呪文を頭の中で唱えるんだ。」

「呪文…ですか…」

「そう。呪文」

さつきテオスが言っていたみたいなのやつ？

覚えるのにすごい時間がかかりそうだな……

「それでその呪文が『Lead』」

「『Lead』って…英語だよな？」

「それじゃ左月。意味をどうぞ」

「たしか…導く、案内する、通じる、先頭に立つ、って意味があったとおもつよ。例文でいうと『Lead him to his seat.』これは『彼を彼の座席に案内する』って意味。」

「英語に関しては完璧だね」

「…まあこれくらいは…」

これだけが取り柄ですから♪

「んで、なんで英語？」

「そのほうが簡単かなって。設定しておいた」

実にありがたい。でもなんか遠まわしにバカにされているような…

「そしてその呪文のあとにテレパシーをする相手の名前を唱える。もちろん頭の中で。」

「最後のつけたしはいらないよ。大丈夫」

「お！そうか！左月は飲み込みが悪いって聞いたから」

「誰に？」

「奏汰に」

やっぱ今日の補習かな？いつのまに…

「そんじゃ質問」

「なに？」

「僕と奏汰とテオス意外にもテレパシーを送ることはできるの？」

「まあできるけど相手は送ることはできないと思うよ。でもどうしてもっていつときにつかってね」

「伝える相手が複数いたら？」

「複数と言っても俺と奏汰にしかしないと思うけど…まあ、そういうときは全員の名前をとらせるかな」

「離れていてもできるの？」

「まあ俺の管理上どこでもできるよ」

「それじゃあ…」

質問中…

「はぁー…奏汰がいつていたのはこういうことか」  
「いや、もうこれで大丈夫だよ」

僕はテオスに質問をしまくった。軽く60個以上いつているんじゃないかな？

わからないことをいつきに聞くとこうなるんだよねー。  
でも、これで大丈夫！だいたいわかった！

「それで終わるにはどうすれば？」

「開始の呪文とは逆に終了の呪文をとえればいい。それでその呪文が『End』普通に終わり」

「OK！そんじゃさっそくためしに……」

Lead テオス！

…できてるかな？

できてるよー！完璧だね！

おお！これがテレパシーか…

どう？

…頭に直接自分の言葉が響いている…これはこれでもおもしろい…  
そう？それじゃ、テレパシー終了してみて

OK！それでは…

End！

どう？

あーあー…おお！大丈夫みたいだ！

「大丈夫だよオス」

「よし。じゃああと奏汰にできるようにしてくるよ」

「説明とかもすべてテオスで」

「そのくらいはやるよ……」

「……そんじゃおやすみ」

「あ、もう寝るんだ」

補習で疲れているんだよね……  
もうへっとへとです。

「……………」

「そんじゃ、おやすみ……ってもう寝てるの？」

そして僕は眠りについた……

## 第8話 テレパシーを覚えた！（後書き）

テレパシーをおぼえた左月と奏汰。

テレパシーでの会話は…使われることが多くなる…かもしれません。

第9話 焼きそばパンはうまい（前書き）

タ・イ・ト・ル<sup>W</sup>

なんというタイトルのネーミングセンス…

## 第9話 焼きそばパンはうまい

「奏汰のばかやろおおおおおおお！！」

全速力で走っています。花村左月です。  
あらずじ的なことをいうと

左月はテレパシーを使えるようになった。

ことぐらいかな？そしていま寝坊して今の時間は11時半すぎ。はい遅刻決定！。

早く寝たつもりなんだけどなあ…走っても意味ないと思うんだけど……  
……寝坊したら走るのがあたりまえだからかな？

寝坊したお前が悪い。

奏汰からの返事が来た。  
そして僕も返事を返す。

そうだけど……そうだけどさ！起こしてくれたっていいじゃないかっ！

テレパシーで起こしたぞ。

え？…本当？

授業が始まったら。

意味が無いじゃん！どうせ遅刻だよっ！

いや…まだ寝ているとは思わなくて…（笑）

絶対わかってただろお前。もういい！そんじゃ！

End！

テレパシーをやめるともう校門前についていた。

正直疲れた……。いまは授業中だ。けど一応職員室いこう。  
そして僕は職員室に向かう……

「んでなんで職員室にいっただけでこうなるんですか…」

ただいまテストを受けております。

職員室にきたら遅刻届けを書かされ…。

西村先生にあつて…。

現在にいたる…。

…Why？

「今日の午前中は全部テストだからな。ここでテストを受けてもらう。」

「…そうだったんですか」

しらなかった……まあがんばりますけど……  
結果は見えています！ほとんど一桁です！  
そして僕はテストに集中することにした…

……焼きそばパンうまい…

さあ、僕は今屋上にいます。本当はすぐに教室にいくつもりだったんだけど…

まあ昼休みがきたので、そのままご飯を食べようと言ったことでの焼きそばパン。

日陰が好きなため屋上で唯一影ができるところに僕はいた。なんか隠れているような感じで焼きそばパンを食べている。……焼きそばパンうまし。

そんなこんなでのほほんとしていると…

「……ここにもいないか……」

奏汰の声だ。こんなところに何のようだろう…  
そしてすぐに…

左月？聞こえるか？

テレパシーのほうから奏汰の声が聞こえた。

Lead 奏汰

聞こえるよ。どうかした？

今屋上にいるんだが…お前今どこにいるんだ？

屋上

は？

屋上で焼きそばパンなう

……

そんじゃとりあえず…

End

そしてちよつとしたら奏汰が僕の視界にはいつてきた。ちよつと疲れているようだ。僕を探していたのかな？

「ここにいたのか…」

「…焼きそばパンうまし」

なぜか呆れた顔して僕をみる奏汰。

だってここしか日陰が無かったんだよ…

「…こういうときにテレパシーって便利だよねー」

「確かにそうだな。」

そして僕の隣に座り買ってきたであろうメロンパンを食べる。そしてこのとき僕は焼きそばパン3個目に突入していた。

「…てか、なんでこんなところで食べているんだよ」

「ここが一番落ち着くところだなーと思ってね」

「…まあ…いいけどよ…お前何個買ったんだ？焼きそばパン」

「5個」

「…多いな」

「予想以上にうまくいったもので」

僕の好物に焼きそばパンをいれてもいいと思った。

もう購買でのパンはこれだけ買おう。普通に安いし。

「…もうすぐ昼休み終わるよ？」

「あーもうそんなに食えなかったじゃねえかよ…」

「…多分僕は、教室にいなかったらここにいますと思うから…そのー  
…ごめんね？」

「きにすんなって。そんじゃまたな」

そして奏汰は走っていった。

あー…僕も行かないと…焼きそばパンあと一個あるけど…

そしていきなり睡魔が僕に襲い掛かってきた。

ずっとそんなにしなかった勉強をすると眠くなるのが僕なのだ。

あー…もういいや……少しだけ…大丈夫……だよ…ね？

そして僕は昼寝をすることにした……

……ふわぁーっと大きな欠伸をしながら起き上がる僕。

僕はどれくらい寝たのかな……奏汰とわかれて40分くらいか……完全に授業に遅れるっ！急がないと！

そう思っただ教室に行こうとしたら足音がしたため僕は動くのをやめた……。

そしてそーっと覗いてみるとそこにいたのは……同じクラスの土屋君だった。

なにをしているんだろう……なんて思っていると……

「……だれだ……そこにいるのは……」

「っ！？」

……ばれた……？少なくとも僕は父さんに習ってなるべく気配を消すように心がけていた。そして今も気配を少し消していた。気配うんぬんとかは苦手だからなんともいえないけど……普通の人気がづくわけではない。何者なんだ……？

「……でてこい。そこにいるのはわかっている……」

そしてこっちをみる土屋君。ああ……ばればれなんだね。

僕は観念して出てくることにした。隠れていても意味はなさそうだし……

「……お前は……」

「えっとー…君は土屋君でしたね。どうしましたかこんな所で。」

土屋君はなんか僕を警戒しているような目で見てくる。

こつやって面と向かって土屋君と話すのは初めてなんだけど…

なんで警戒してくるのかわからない。まあ僕も少なからず警戒はしているけど…

「……花村左月。単刀直入に聞く」

「はい…なんででしょう?」

なにを聞かれるのだろうか?そう思って土屋君の言葉を待つ…  
そして土屋君が口をひらく。

「……お前はいったい何者なんだ?」

## 第9話 焼きそばパンはうまい（後書き）

左月の好物に焼きそばパンがはいりました。

こんなんでもいいんでしょうかねー…この物語…

少しでもオリジナルを入れたと思って頑張っ  
てはいますが…  
なかなかむずかしいです^^；

## 第10話 英語だけはなぜかできる（前書き）

タイトルってこんな感じでいいのでしょうか？  
でも気づいたら10話目です！これからは続けられるんでしょうか  
ね…

## 第10話 英語だけはなぜかできる

……何者か……って言われても……

「……なんで……こんなことを聞くんですか？」

疑問をかえす。けど、正直なんでこんなことを聞かれたのか……

聞かれた瞬間、僕はわかってしまった。たぶん土屋君は僕のことを調べたんだろう。なぜ調べたのかはわからないけど……そして僕は転生してここにきた転生者。つまりイレギュラーだ。そして調べたとなると……

「……お前を調べたところ、お前のプロフィールはすべて不明となっていた。今住んでいるところもすべて。わかっているのは文月学園2年Fクラス所属……と言うことだけ。ついでに同じ日に転校してきた藤村奏汰についても調べてみたが結果は同じだった。だから聞いたまでのこと」

こうなるわけだ。でも住んでいるところはわかると思ったのだけ……まあ、彼らからみると僕と奏汰は謎の転校生ということになるわけだ。

こういうのは土屋君も初めてなのか、警戒が強い。

「そんな怖い目でみないください。僕は悪い人ではありません。」

「……………」

「まあ……僕を調べたらこうはなりますよね……」

「……質問に答える」

うう……こういうのにはちょっと弱いんだよね……

転生者っていうことは言わないほうが……いいよね？

だったら……

「……僕はただの転校生です。」

「……ただの転校生はプロフィールがすべて不明なわけがない」

ですよー……あーこういういいわけまったく考えていなかった……でも、面白いイベントだよー」ここはもうちょい面白くしておこう」

「……たしかにそうですね……でも……」

「………」

「この名前が偽名だとしたら……どう考えます？」

「……っ！！」

嘘だけど。この花村左月という名前はまぎれもない本名だ。

だけど今の僕については謎のまま。土屋君は僕の名前は偽名だということを信じてしまうだろう。でも今は僕がここにきてまだ少ししかたっていない。いまは教えないほうがいいだろう。でも一応これは嘘ということは教えておこう。

「……こんな簡単な嘘にひっかかるんですね」

「………嘘？」

「はい嘘です。意味もなく偽名で転校することありますか？」

「……っ！」

「単純ですね。もういつかい…いつておきます」

少しだけ間をあけて僕はこういった。

「僕はただの転校生です。ただ、それだけです」

…こういったほうが面白いかな？まあこれは嘘とも言えるけど…  
転生してきた転校生なんて普通の高校生じゃないからね。

「……この話はもう終わりです。」

「………」

「ところで…どうしてこんなところにいるんですか？」

僕が思うところ、今は授業中だと思う。

だからなんでこんなところに土屋君がいるのか…最初から疑問だった。

そう思い僕はのこり一個の焼きそばパンを食べ始めた。

「……いまはBクラスとの試召戦争の最中。俺は雄二に合図があったらここから大島先生とBクラスの教室に飛び込み、そこでBクラス代表を倒せと言われた。」

「……重要な役割をまかされているんですね…それで大島先生は…」

「……もうすぐくる」

「…そうですか」

そんじゃ僕は、Bクラスの教室にいつて作戦の成功を見ておきますかねー…

…やられないようにしないとー…焼きそばパンってどうしてこんなにうまいんだろう。

「それでは僕はいきますね。作戦の成功を願っていますよ。」  
「……………」

土屋君から見るとシリアスな感じだけど。僕から見るとそのムードがぶち壊された感じがな？

これで僕はある意味土屋君から嫌われたかもしれないねー…

僕は焼きそばパンを食べ終わり大島先生と入れ替わるように屋上から消えた。

そしてBクラス教室前にて…  
いまのBクラス教室前には人がいるんだけど……だれも僕に話しかけてこない…

多分…転校生がいるっていう話は聞いているとは思っただけけど、顔を見たわけではないため僕が誰だかわからないのだろう。それが、Aクラスにも転校生がきたというのもあってどっちかまよっているのだろうか……まあ見た目頭よさそうにみえるからね僕は。それとも昨日休んだから？っていうか今ほかのクラスは授業中というのをこの人たちはわかっていないのだろうか……だとしたら……大丈夫？そう考えていたら……

「あゝ…あなたはFクラスですか？」

Bクラスの人だろう。ここにいるのはFクラスの人とBクラスの人だけだと思うけど…

まあここは正直に答えよう。

「はい。僕はFクラスですよ」

「Bクラス真田由香いきます！試験召喚！」

え？ナニコレ？Fクラスって言ったら即これ！？

えっと…科目は…英語！？ラッキー僕の得意教科だ♪

「えーっと…Fクラス花村左月いきます！試験召喚！」

英語

Bクラス 真田由香 169点

VS

Fクラス 花村左月 509点

「あなた…その点数…」

「僕英語得意なんですよ。運が悪かったですね」

その英語以外は終わっているけどね…

僕の点数をみたのか、近くにいた人もきた。大丈夫かな？

「つく！Bクラス工藤もいきます！」

「Bクラス芳野もいきます！」

「「試験召喚！」」

英語

|      |      |      |
|------|------|------|
| Bクラス | 芳野孝之 | 189点 |
| Bクラス | 工藤信二 | 177点 |
| Bクラス | 真田由香 | 169点 |

V S

|      |      |      |
|------|------|------|
| Fクラス | 花村左月 | 509点 |
|------|------|------|

…大丈夫…かな？

「…こんな奴がいたなんて聞いていないぞっ！」

「そりやそうですよ。いつていましてんから」

言つと面白くなさそうだから（笑）

長くやるとFクラスの人にもばれる…でもそれは避けたいところ…  
といつても無理っぱいな…まあとにかく…

「……Started？」

そして僕はかつこつける。なんかちよいとはずいけど…行きますか！

## 第10話 英語だけはなぜかできる（後書き）

英語はAクラス並の点数でした左月君！  
これは予想できたことだと思えます。

## 第11話 Bクラス戦（前書き）

Bクラス戦もこれ1話で終わります。  
省略しすぎですねわかります。

左月が1日休んだ日の事についてはいずれか書くと思います。

## 第11話 Bクラス戦

「今見たこと、誰にも言わないでくださいね？」

英語

Bクラス 芳野孝之 0点

Bクラス 工藤信二 0点

Bクラス 真田由香 0点

VS

Fクラス 花村左月 509点

僕が英語でこの点数をとっていることをね♪

僕の召喚獣の武器は簡単に言うのと鎖だ。それを操り一瞬で相手の点数を0点にした。

ただそれだけだ。そして三人は西村先生に連行させられる。……なんかごめん。

さて… Fクラスの人達はだれもみていなければいいけど……とにかく教室に入ろう。

そして僕はBクラスの教室に入る。

入った直後に……

「Bクラス戸田いきます！試獣召喚！」

「同じくBクラス隅田いきます！試獣召喚！」

「こちらもBクラス蘭田いきます！試獣召喚！」

いきなりこれ。

ここには田のつく人が多いのかな？しかもこちらもって（笑）  
まあいいや…まだ英語だし…

英語

Bクラス 戸田美和 156点

Bクラス 隅田幸喜 172点

Bクラス 蘭田香苗 178点

VS

Fクラス 花村左月 509点

英語だからいままで僕が一瞬で補習行きになった気持ちはいまこ  
でわからせてあげよう。

たしか腕輪って言うのがあったからそれを使ってみようか…

「いきます！『鎖の舞』！」

キーワードを言うと鎖が5本降ってきた。

そしてそのまま相手の召喚獣にあたった。なんかラッキー♪

英語

Bクラス 戸田美和 0点

Bクラス 隅田幸喜 0点  
Bクラス 蘭田香苗 0点

V S

Fクラス 花村左月 409点

そして一瞬で補習逝き（笑）…ごめんなさい。

でもこれで僕の気持ちがあわってくれとうれしいかな？

しかもこの鎖操れるみたいだ……まあいまは使わないでおこう。

僕はそのままBクラスの人たちを補習逝きにさせた。少しダメージを負いつつ…

「Bクラス九条いきます！試獣召喚！」

「Bクラス木村いきます！試獣召喚！」

英語

Bクラス 九条葵 177点

Bクラス 木村紅 156点

V S

Fクラス 花村左月 339点

なんか名前が葵に紅となんだかんだでぴったりな2人組みを最後に…

「それではいきます！」

「こいつ本当にFクラスか!？」

「知らないわよそんなこと！」

英語

Bクラス 九条葵 0点

Bクラス 木村紅 0点

VS

Fクラス 花村左月 339点

教室にいるほとんどの生徒を補習送りにした。

こんなに目立った行動してFクラスの人達には…ばれないでほしいと願おう。

そして僕は教室の奥に進む。すると…

「あなたが… Bクラスの代表さんですか？」

「… ああ、 Bクラス代表の根本だ」

焦りを感じたのだろう。すこし顔がこわばっていた。

周りには…まだBクラスの生徒がいるのか…やっと代表の近くにいたのに…

「Fクラスにまだこんな奴がいたとは…クソっ！」

「本当はばらしたくなかったんですけどね…まあ気分と言っことで

…」

とまでいったら……

ドン！

という音が聞こえた。しかも近い。  
なんだろう……？

「Bクラス今野いきます！試獣召喚！」

英語

Bクラス 今野一也 189点

VS

Fクラス 花村左月 339点

まだやるのか…

はやく…Fクラスの人たちが来る前に…倒さないと…  
そしたらまた…

ドン！

さっきから何回かこの音がするけど…嫌な予感しかない…

「さっきからドンドンと、壁がうるせえな。なにかやっているのか。」

「…僕は勝手に行動させてもらっていますから何も知りません…しかし本当になんでしょうかね…コレは…」

僕は召喚獣を操りながら言った。このことは本当だ。

僕はやっぱりFクラスの教室に戻ったほうがよかったかも…といまさら後悔。

そしたら…

「だああーっしやあーっ!」

という大声とともに…

ドゴオッ

壁に穴が開いた。これにはここにいる人たちもびっくりだ。そしてその隙に……

「今です!」

「何っ!？」

英語

Bクラス 今野一也 0点

VS

Fクラス 花村左月 292点

相手にダメージを与えて補習逝きにする。字が違う?キニスナハ

笑)

僕もダメージを受けてしまいました。が仕方が無いか……。そして壁にできた穴の先には……

「くたばれ根本恭二ーっ！」

Fクラスの吉井君と島田さんがいた。嫌な予感の中！

あ……やばい……逃げようかな……

でもいきなりの訪問者にBクラスの人達は僕のことを忘れてくれている様子。

なんと運のいいことでしょう(笑)影が薄いつて素晴らしい(笑)そしてその隙に物陰に隠れた。

さてどうなることやらっ！

「遠藤先生！Fクラス島田が……」

「Bクラス山本が受けます！試獣召喚！」

「つく！近衛部隊か！」

「は、ははっ！驚かせやがって！残念だったな！お前らの奇襲は失敗だ！」

まだいたのか近衛なんとか。助けに行こうかな……

でもなあ……どうしよう……そんなこんなで迷っていたら……

ダン、ダンッ！

不意にそんな音がした。

そういえば僕、屋上で土屋君にあって作戦を聞いていたんだった。開かれた窓からなんなく侵入してきた土屋君と大島先生。

なんという登場の仕方だ。かつこいいとしかいいようがない。

「……Fクラス土屋康太」

「き、キサマ……！」

「……Bクラス根本恭二に保健体育勝負を申し込む」

「ムツツリイニイー！」

吉井君たちが近衛なんとかをひきつけているため、あの人はもうどうしようもない。

でも、土屋君って保健体育どれくらいなんだろう…

「……試獣召喚」

保健体育

Fクラス 土屋康太 441点

VS

Bクラス 根本恭二 203点

……最強ですなはい。土屋君は僕と同じタイプのひとみたいだ。  
そして土屋君の召喚獣が一瞬で持っていた小太刀でBクラス代表の  
召喚獣を切り捨てる。

これでBクラス戦は幕を閉じた…



## 第11話 Bクラス戦（後書き）

名前はがんばって考えたところもあります。  
最初の3人は原作にでていましたが…

Bクラス戦では左月にがんばっていただきました。

## 第12話 戦後対談（前書き）

この話はほとんど原作ですね。

## 第12話 戦後対談

「うう……痛いよう、痛いよう……」

そういつて痛がる吉井君。いやいや大活躍じゃないでしたか！  
心の中で拍手をする僕。

とまあ僕は今隠れている訳で……人がどんどん集まってくる。  
それにまぎれて僕は皆にまじる。  
こればれていないはず……うん。

「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談といくか。な、負け組み代表？」

「……」

座り込んでいるBクラス代表。  
なんだろう、すごくおとなしい。

「本来なら設備を明け渡してもらい、お前らには素敵な卓球台をプレゼントするところだが、特別に免除してやらんでもない」

あれ？坂本君ってやさしい人だっけ？……なんか裏がありそうなの？  
そして周りが騒ぎ始める。当然だろうねこつというのは。

「落ち着け、皆。前にも言ったが俺達の目標はAクラスだ。ここがゴールじゃない」

「うむ。確かに」

「ここはあくまで通過点だ。だから、Bクラスが条件を呑めば解放してやるうかと思う」

… Aクラスね… でも確かにこのままいけばAクラスにも勝てそうな勢いだ。

Bクラスにも勝てたんだ。可能性はないわけじゃない。ここまでよくいけたよね… てなわけでその条件とは…？

「… 条件はなんだ」

「条件？それはお前だよ、負け組み代表さん」

「俺、だと？」

「ああ、お前には散々好き勝手やってもらったし、正直去年から目障りだったんだよな」

… まわりの人達はなにもいわない。そしてそれをいわれたBクラスの代表さんも。どうやら本当のことみたいだ。自覚があるのか… でもどんなひどいことを…？

「そこでお前らBクラスに特別チャンスだ」

なんだろう… すごく嫌な予感が…

「Aクラスに行って、試召戦争の準備ができていると宣言して来い。そうすれば今回は設備については見逃してやってもいい。ただし、宣戦布告はするな。すると戦争は避けられないからな。あくまでも戦争の意思と準備があるとだけ伝えるんだ」

「… それだけでいいのか？」

… 予感がはずれた？人生たまにはそういうことがあるよね…

「ああ。Bクラス代表がコレを着ていった通りに行動したら見逃そう」

そういつて取り出したのはこの学園の制服だ。

……しかも女子の制服だ。

嫌な予感は的中した。できればはずれてほしかった。

「ば、馬鹿なこと言うな！この俺がそんなふざけたことを……」

そりゃいやだろうねー男は誰だって。

そう思っていたら……

『Bクラス生徒全員で必ず実行させよう！』

『任せて！必ずやらせるから！』

『それだけで教室を守れるのなら、やらない手はないな！』

代表く教室

なんという（笑）

信頼ないねー可愛そうに…

「んじゃ、決定だな」

「つく！よ、寄るな！変態ぐふうっ！」

「とりあえず黙らせました」

「お、おう。ありがとう」

変わり身はやっ！なんという嫌われようなんだ…

…でも…なんかなあ…

「では着付けに移るとするか。明久、まかせたぞ」

「了解っ！」

そして倒れているBクラスの代表さんに近づくと制服をぬがせた。見方をかえると吉井君が変態に見えるのは僕だけなのだろうか…

「う、う…」

「ていつ！」

「がふっ！」

遠慮ない攻撃だ…。さっき起き上がろうとしていたのに…  
…… どんだけ嫌われているんだ。

「うーん…。これ、どうするんだろう？」

「私がやってあげるよ」

「そう？ 悪いね。それじゃ、折角だし可愛くしてあげて」

「それは無理。土台が腐っているから」

それはさすがに酷すぎる。

「じゃ、よろしく」

さっき話しかけてきた人にBクラス代表をまかせ、  
吉井君はごそごそとあの人の制服を探った。

…… どこまで変態なんだ。

っと思っていたらある封筒を取り出し、そしてポケットに入れた。  
どうやら目的はあの封筒だったみたいだ。… なんかゴメン。

しかし… なんだろうね。あの封筒。

そしてあのひとの制服はどうするつも… …… って捨てたあああああ  
ああ！

普通そこまでのものなの？ 酷すぎないか？

そして… あそこは姫路さんの席だ。そしてその姫路さんの鞆にその  
封筒を入れた。

あれは姫路さんのだったのか。… じゃあなんで吉井君はそんなに…  
… 人のためにがんばったんだろうか…？

「吉井君！」

「ふえっ！？」

カメラSet！録画Start！

……突然後ろから話しかけられると…変な声が出るよね。

それは人としてあたりまえのことなのだよ。吉井君、君はものすごい羞恥に耐えているはずだ。その気持ち……よくわかる！！

「な、なに？」

「吉井君……！」

あるえ？姫路さんが泣きそうな顔になったよ。

あれ？吉井君は何もしていないよね？

「どうかした？…ほわあぁっつと！？」

状況説明。姫路さんが吉井君に抱きついた。

大丈夫証拠はばっちりだ。あとで高画質にして見ようではないか。

「あ、ありがとう、ごきます……！わ、私、ずっと、どうていいか、わからなくて……！」

「と、とにかく落ち着いて。泣かれると僕も困るよ」

「は、はい……」

大丈夫だよばっちりだったからね。さーてだれに言いつけようかな  
やべえ誰かに言いつけたい…

「いきなりすみません…」

「も、もう一度……」

「はい？」

「もういちど壁を壊したい！」

とうとう壊れたのか吉井君！でもその気持ちはわからなくもない！  
見ている僕でも心臓バクバクだからね！壊れるのもなんか仕方  
がないと許せると思う！

「あの、さらに壊したら留年させられちゃうと思いますよ……」

それは本人もわかっていると思うよ姫路さん。

「……それじゃ、皆のところに行こうか」

「あ、待ってください！」

逃げようと思ったんだろう。残念だったね吉井君。

まあ、僕は補習があるし急いでいかないと……残念……今さっき撮った  
動画を保存して……

……補習を受けにいきますかね……そして吉井君と姫路さんのいると  
ころをあとにした……

途中どっかの空き教室の前を通ると……

「そういえば……気になることがあったんだが……」

「それよりこいつらをとめてくれっ！」

「Bクラスの教室には本隊がいると思ったんだが……実際にみたら  
近衛部隊と代表のお前だけだったんだ。しかも俺達FクラスよりB  
クラスのほうが補習室送りにされているやつが多い。これはどう  
いうことだ？」

これは坂本君と根本君の声。しかも内容が結構僕関係の話。やばいやばい今ここで目立ったらこき使われそうなのがしてならない。そんなめんどくさいことはゴメンだ！

「……確かに、それはきになる」

「そうじゃのう……姫路はBクラスの教室には来ていなかったはずじやろう？」

まずい！

「ああそれは……」

「失礼します。根本君は……いますか？」

状況説明開始。根本君女装中そしてただいまメイクをしてもらっているみたいだ。さすがに……にあわなすぎてびっくりだ。いっちゃ悪いけど気持ち悪い。

「何のようだ花村……根本ならここにいるぞ」

「ちよっ、おまつ！」

わかってるわかってるけどゴメン。気持ち悪いよ。

「に……西村先生が……お呼びです」

「……わかった。着替えてからいこう」

「そのままいけ。あまり時間が無いんだ急いでくれよ」

「それはあんまりだろ！」

……なにがともあれ根本君の連れ出し成功！

しかし近くで見るとほんとに気持ちわる……似合わない。

少し離れたところで話をする。

「すみません。嘘をついて呼び出してしまつて…」

「え？嘘だったのか？」

「はい…話したいことがあつたので…」

「…それでなんだ？」

「僕の英語の点数がAクラス並の点数だということをFクラスの誰かにばれるまで言わないでいてほしいんです」

こき使われたくないし、めんどくさいし、目立ちたくないからね。思いつきり私情だけなんだけど、傍観者のままのほうが楽だしね。それと、□がすべて転生者とかそういうのがいろいろばれそうだし。

「……いつたら？」

「このあと撮る予定の写真を全校生徒にばらまきます」

「交渉成立だ。絶対に言わないでおこう」

はいい（笑）弱みを握るって楽しいな♪

「ありがとうございます。それじゃ僕はこれで……撮影会、がんばってくださいね」

「……（泣）」

男涙を流しながらさつていった…がんばれ…根本君…まあ□止めは成功しましたし…

そんじゃ僕は補習室にいきますかねー…

僕は小走りで補習室に向かった…



## 第12話 戦後対談（後書き）

やっぱり黙らせたほうがおもしろいかなと…

### 第13話 お二人様ご案内♪（前書き）

タイトルに深い意味はありませんw

○○saidと言う感じの書き方にしてみました。

でもほとんど左月saidになりますかね…^^;

### 第13話 お二人様ご案内♪

左月side

「あのね奏汰。僕はわからないんじゃないって知らないだけなんだ」  
「どっちも同じ意味だ」

現在、僕は補習室で奏汰に国語をおしえてもらっています。

周りには西村先生だけ。やっぱり自分から補習する生徒なんていないんだー…

まあそんなこんなで…

「な・ん・で・お前は日本語はできて国語ができないんだ！」

「日本語は日本語。国語は国語でさっぱりなんだよねー」

「おかしい。おかしいぞお前」

「What? Troubled It? (え? なんのこと?)」

「: Once more (: もう一回)」

「What? Troubled It?」

「: I do not know (: わからない)」

「おい。いつのまにか会話が英語になっているぞ」

あれ? 『Troubled』ってならわなかったっけ?

奏汰はリスニングが苦手なのかな?

「: 英語はできるのに…なんで国語は…」

「まあ、このまま補習を続けるぞ。」

そんなこんなで補習は続く……

「奏汰ー。眠い…」  
「…俺もだ」

あのあとずっと漢字やらことわざとやらで…頭をすごくつかった。  
そのためか…眠い…そして明日もこれからもずっとやると思うと…  
気が重い…外に出るとやっぱり真っ暗だった。  
…こんな時間に帰っているのは僕達だけだろう…

「えーっと…大丈夫かな？」  
「……………（ぐったり）」

……と思っていたが。まだ誰かがいた。  
暗くてよく見えないけど……誰かが倒れていた…  
血を出しながら。  
そしてその隣でしゃがみこんでその倒れた人をつんつんと突付いて  
いる人がいた。  
……えっ？…これってなんかやばくない？

「…えーっと…どうしようかな…」  
「おっ工藤じゃねえか。まだ帰っていなかったのか。それで…どうかしたのか？」

「あ！藤村君！…それがね…」

奏汰の知り合いかな？だったらAクラスの人かな？

そ…それより。どうしてこんなことに…

僕はなぜか近くにあった輸血パックを使い、応急処置をした。

あれ？この人よく見ると……土屋君？

「僕は日直の仕事が長引いてね。帰るのが遅くなっちゃったんだけど…それで帰ろうとしたら校門前にこの人がいてね…それで通りがかったら急に鼻血出して倒れちゃったんだ…」

「鼻血？…ここらへんを通ったときになんかなかったか？」

「ん…そうだね…そういえば…強い風がきたと思うけど…」

「……………あ…」

僕はわかってしまった。

Dクラスと試召戦争をする前に土屋君の事を紹介していたんだけど…

土屋君はものすごくエロいんだと…それでついたあだ名が『寡黙な性識者』<sup>ムツリーニ</sup>

ムツリスケベからとったらしい。

それでそういうことを見たり考えたりすると鼻血がでてしまうらしい。すごい特性だ。

多分強い風が来たときに工藤さんの……もういいか……わかんと思うし。それで鼻血を出しすぎて気を失ったのかな？大変なんだね…土屋君も…

「ボク今日スパッツ穿き忘れちゃったんだよね…」

「…おめえな…いや…まさかそれで鼻血がでたっていうのは…」

奏汰大正解！すごいな！探偵になれるんじゃないのかな？

…なぜこんな時間に土屋君がここでまっているかはわからないけど…

このまま放つてはおけないし…

「……仕方ない。僕の家運ぶか…こんな時間だし…それにちょっと心配だし…」

「…まあ、そうするか…俺が運ぶよ」

「うん。ありがとう」

奏汰が土屋君を担ぐ。そして僕は奏汰の荷物をもつ。もう鼻血はでていないみたいだけど…念のためだ。

「ボ…ボクもついて行っていかな？なんか悪いしさ…」

「…別にいいですよ。そのかわり親に連絡してください。心配していると思いますから」

「うん！わかったよ」

そういつて親に電話する工藤さん。…大丈夫なのかな？

…電話が終わったみたいだ。どうやら大丈夫みたいだ。なんて説得したんだろう…

あとで土屋君の親にも連絡しないと…起きたら連絡先聞こう。

「そんじゃいくぞ。」

「うん！」

そして僕たちは僕の家へと歩いた…

「ついたぞ」

「……え？」

工藤さんが驚いているようだ。そりゃそうだ。ここは高級マンションなのだから中が豪華だ。

僕もまだなれていないからね。そりゃもうすごい。

そして工藤さんが呆然としているままエスカレーターに乗り16階につき、僕の部屋へ入る。

「お疲れ奏汰。土屋君はこの部屋に寝かせておいてよ」

「おーわかった」

そして奏汰が空き部屋にあるベッドに土屋君を寝かせる。

ちなみに空き部屋といってもスイートルームみたいな部屋だ。そしてこのような部屋があと二つある。そのうちの一つが僕の部屋。そしてもう一つが空き部屋だ。お金持ちはこんなかんじの家が好きなのか。というのが僕の最初の印象だ。

土屋君を寝かせたら工藤さんの意識がここに戻ってきたようなので僕に話しかけてきた。

「えつと…ここは？」

「僕の家です」

「…いったい何者？」

この台詞2回目。まあ、今度は普通の回答を…

「そういえば…会っの初めてでしたよね…えーっと…初めまして。」

僕の名前は花村左月です。何者が…って言われても…まあ、気にしないでいきましょう」

「えっと…花村君だね。…ボクは工藤愛子だよ。こっちこそ…よろしくね…」

そして頭を下げる工藤さん。まだこの家に驚いているようで僕の回答にツツコミがこない。

まあこれはこれで好都合…

「はい。よろしくお願いします。まあ、ゆつくりしていつてください」

「あ…それじゃあ、ボクはこの人が起きるまでまっ待っていていいかな？」

「いいですよ。こっちは夕飯の準備があるので助かります。それでは目を覚ましたら呼んでくださいね。」

「うん。わかったよ」

そして僕は部屋から出る。そういえば…奏汰がいない…どこにいったのか…

僕はキッチンにむかった。そしたら…

「おー！おそかったな左月。」

「……奏汰？なにやってんの？」

そこには奏汰がいた。テーブルにはいろんな和食がならんでいる。

「なにつて…料理」

「…これ…奏汰が？」

「ああ。一応、料理は得意なんだ」

意外な特技だ。奏汰はなんでもできるんだね…  
僕なんて簡単な物しか作れないのに…

「あとは味噌汁だけなんだ。まだちょっと待ってくれるか？」

「いや、僕手伝うよここは僕の家だし。食器ぐらいはだすよ。」

「そうか。ならたのむ」

そして僕は奏汰のお手伝いをすることにした…。

## 愛子 side

花村君が部屋をでていった。ボクは周りを見渡す。

しかしすごい部屋。まるでどこかの高級ホテルみたい。花村君って  
お金持ち？

Aクラスでこんなかんじのは慣れたと思ったんだけどね…  
でも、もうこれで慣れたかな？そしてボクはベットで寝ている人を見  
る。

…あの時は暗くて見えなかったけど…なんかちょっと…かっこい  
い…ゲフンゲフン

…しかしパンチラで鼻血をだすとは…面白い人だね…

この人…なにクラスかな？

「……………うつ」

あ……………起きたかな？……………顔色ももう大丈夫そうだし…もう平気だね。

「目を覚ましたかな？」

「……………ここは？」

僕の目の前で寝ていた人は体を起こし周りを見渡す。

この高級感あふれる部屋を見てびっくりしたのだろう。少ししたら固まった。

プツ…おもしろい反応だな…まあ最初ボクもそうだったケド…

「……………お前は…たしか」

「ああ。ボクの名前は工藤愛子。Aクラスだよ 趣味は音楽鑑賞で特技は…」

おっと…パンチラって言ったらまた鼻血がでちゃうかな？

また倒れてもらったら困るし…ボクとしては残念だけど、仕方ないかな…

えっと…だったら…

「【自主規制】です」

「……………っ！！（プシャアアア）」

「…あ」

…あちゃーやっちゃったよ…あとで花村君に謝っておかないとな…

「……………お前は俺を殺す気かつ！」

「…ゴメンゴメン、そんなつもりはなかったんだけど…それで？君の名前は？」

あゝ面白いなあゝでもこれ以上花村君に迷惑をかけるわけには行かないし…

気をつけないとね…

「…………土屋康太。Fクラス」

「土屋君だね、よろしく♪さっきは本当にゴメンね。わざとじゃないんだけど…」

ボクは頭を下げる。鼻血出させてしまったのはボクのせいだから、謝ったほうがいいよね…

「…………わざとじゃなけりや別にいい。」

「そう？ありがとね♪」

「…………っ！別に…」

ありや？なんかそっぽむいちゃった。ボク何かしたかな？あ！女の子にお礼を言われたから照れちゃったからとか！そう考えていたら…

「失礼します。起きましたかーって、起きていますね。」

花村君が部屋に入ってきた。

「あ！そういえば…呼びにいくの忘れちゃった…」

「いえ。大丈夫ですよ。話に夢中になるのは仕方ありませんしね」

「…………花村？ということは…？」

「もう、大丈夫みたいですね。ここは僕の住んでいる所です」

「……………ここが？」

土屋君が驚いた顔をして花村君を見た。そういえば誰の家とか言っていないや。

驚くのもしかたないか…ていうか…

「そついえば…2人とも知り合い？」

「はい。クラスメイトです」

「ええ！？そうだったの…ていうか花村君Fクラスなの！？」

「はい。言っていないませんでしたっけ？」

…眼鏡とかしているし、見た感じ冷静だから少し上のクラスかと思  
った…

「まあ、見た目にだまされるなってことですね」

「…まさにそうだね」

「……………（こくこく）」

「とまあ、話はそこまでにして…夕飯ができましたのでリビングに  
きてください。奏汰もまっていますから…」

「わかった。それじゃいこうか、土屋君！」

「……………っ！お、おい！」

土屋君がベットから降りたら、ボクは土屋君の手をつかみグイグイ  
とひっぱってリビングへ向かった。今日初めて会ったけど、土屋君  
とは仲良くなりたいな……………話があいそうだしね♪

第13話 お二人様ご案内♪（後書き）

フラグ…？

まあ、もともとこの保健体育コンビは好きなのでいれてみたかった  
んですよね^^

ちょっとグダグダになりましたが…orz

## 第14話 皆でご飯（前書き）

とまあ、タイトルについてはそんなに考えずにいきましょう。  
ここはオリジナルですね。

## 第14話 皆でご飯

左月side

「…それでここまで運んできたわけです」

「ほんとにゴメンね？」

「……………そう何回も謝るな…というか全部俺のせいなんじゃ…」  
「…お前ある意味純情だよな」

僕たち4人は奏汰の作った料理を食べていた。

今は夕飯ついでになぜ土屋君がここに運ばれたかを話していた。

土屋君と工藤さんは意外と性格がいいことがわかった。

というかこの2人…

「でもさ、なんで鼻血がでるようになったの？まあ、ボクもでるぢやでるんだけど…そんなにはでないし…」

「……………多分、生まれつき…」

「え？生まれたときからそうだったの？え…えっ？」

初対面だよな？こんなに仲良くなるのが早いなんて…  
異性どうしてわかってているのかな？

「……………冗談だ。真に受けるな」

「…生まれたときからって言うとな鼻血を出しながら生まれてきたとか…」

「……………聞してる？」

話の内容はともかく、仲がよろしいことで……

まあ、僕と奏汰は蚊帳の外みたいだけど…。

「でも時が経つにつれて鼻血の噴射量がふえっていったとしたら…」

「………お、おい。聞いてるか？だからこれは冗談…」

「…はっ！それじゃあまさか土屋君って『自主規制』をしたことが…」

「………どこをどうしたらそうなるっ！ていうか俺の話を聞けっ！」

会話（笑）

本当に土屋君の言うとおり、なぜそうなる（笑）

どういう思考回路しているのやら…土屋君ってツツコミの方だっけ？  
そんな会話を温かく見守る僕と奏汰…

まあ、暇なのでなんとなくの…

仲がいいねーあの2人は…ほんとに初対面か？って感じ…

まったくもって同感だ。正直びっくりした…

僕から見ると、カップルに見えるんだけど…

どこからどうみても初対面にはみえねえよなやっぱり…

どうやら奏汰も同じ意見のようで…

まあ僕は暖かく見守らせてもらいますよ、早とちりってこともありそうだし…

俺も同意見だ。考えてる事は同じってか？

お、気が合いますねえ！

まあ、あたりまえだと思うけどな…

おー！ご飯食べ終わりー！いやしかし料理上手いね奏汰。たまに食べに行く事にするよ

そりゃ、ありがとさん

そんじゃかたづけるねー…

そして僕は食器を片付けにいった。

2人の会話の内容がものすごく気になった…

康太 side

俺は夕飯を食べた後、家族に連絡をとるのを忘れたことを思い出しすぐに連絡をいれた。電話をすると颯兄ができてこっぴどく叱られた。もう9時半近くだからあたりまえだと思うが……帰ったらまた怒られるんだろうな…

ちなみにあの夕飯での工藤と話していたことは食べ終わるまで続いた。

あの時藤村が助けてくれなかったらさらにひどい事になっていたんだろうな…

今は花村に送ってもらっている。花村の住んでいるマンションは隣町にあつたらしく、正直何処をどういったら家につくかわからない。もちろん文月学園からも程遠い。何時に起床して学校にいつているんだろう…

「そついえば藤村君の家はどこなの？もしかして、花村君と住んでいるの？」

「俺は左月ん家の一階下の15階に住んでいるんだ。左月とは近所さんってことになる」

「……………藤村もあんなところに住んでいたのか」

「そういえば言っていないませんでしたね……………まあ僕はもう慣れましたけど」

……………この2人は大金持ちかなにか？

この2人は調べてもなにもないし……………もう少し情報を集める必要があるかも……………」

まあ今住んでいる場所は覚えたとしても……………歳とか……………元はこの学校だったのか……………」

「……………あの……………そんな警戒しなくても大丈夫ですから……………」

「……………あ、いや、スマン」

警戒しているつもりはなかったんだが、いつのまにかにらんでいるように見えてしまったらしい……………冷静をたもっているつもりだったんだが……………」

「……………まあ、その気持ちはわからなくはありませんがね……………（ボソッ）」

「……………なんかいったか？」

「……………なにもありませんよ」

……………？……………よく聞こえなかった。なにをいつていたんだ？

「……………ねえ、土屋君」

「…………………………なんだ？」

「……………花村君さ、変な感じがしない？」

工藤が急に変な事を言い出した……………。変な感じ？

「……………なにがだ？」

「えっと、これは勘なんだけど…何かに怯えてるって言うのか…なんかを隠している…とか…なんか変な感じ…がする」

「……………怯えている？」

「うん。まあ勘だけど…」

？…とてもそういう感じには見えないんだが…

「まあ、気のせいだよね。土屋君、さっきのは忘れてね」

「……………あ、ああ」

でも…きになる。なぜ工藤はそう思ったんだ…？

そういう疑問を思いつつ、そのまま俺は家に送ってもらった。家に付いた時にはもう11時を過ぎていて家族にもものすごく怒られた…。

## 第14話 皆でご飯（後書き）

ムツツリーニってツツコミでしたっけ？

いや絶対にボケのほうだと私は思ったんですが…意外とツツコミでもいけるんじゃないでしょうか？

とまあ、少し原作との設定をかえての挑戦でしたが…大丈夫でしたでしょうかね？

あと、テレパシーの『Lead』とか『End』を省略しているように思います。

## 第15話 意外と楽しいFFF団（前書き）

これはAクラスと一騎討ちをする前のお話ですね。

いやー… もうタイトルを考えるのに一苦労する自分って…orz

## 第15話 意外と楽しいFFF団

左月side

現在学園長室にて…朝登校してなぜか教室に入ろうとしたら西村先生に呼び止められ、学園長室に連行されていた…うん。さっぱりわからない…

そしてなぜか奏汰もいるし……どういうことだ？

「…学園長、それで…なんですか？」

奏汰が学園長に聞く。正直僕は緊張していた。…なにかしたっけ？

「あんた達二人を呼んだのは他でもないよ…ちょっと聞きたいことがあるさね」

「…聞きたいこと…ですか…」

「…これは、どういうことだい？」

「……………ああ、これですか」

学園長が見せてきたのは僕と奏汰の個人情報。

すべて『不明』と書かれている。…なぜに学園長まで調べるんだ…

「なぜ、調べたんですか？僕達の事を…」

「この前どこの高校にいたのかを調べようとしたらこうなったんだよ」

「…ああ、なるほど」

前の高校から僕達の成績はどうなのかを調べようとしたのかな？  
あらら運の悪い…

「さて、もう一回聞く…これはどういうことだい？」  
「……………」

…奏汰、どうしようか？

…さあて、どうしようかね…まったく言い訳が思いつかねえよ…  
だよね…

「…言えない理由がある…と？」  
「……………はい」

転生者だからです　なんて、普通言っても無理だし…

「それじゃ、ちょっとやってほしいことがあるさね」

「…？やってほしいこと…ですか」

「Aクラスの藤村は無理としても、Fクラスの花村なら頼めることだよ…」

「？僕だけ…ですか？」

なんでAクラスは無理でFクラスはいいんだ？

「お前さんにやってほしいことは…」

あの土屋君鼻血事件を終えて…今は点数補給テストを終えた二日後になる…Bクラスにも勝ったからあとはAクラスに勝つだけ。ていうか坂本君の目的ってなんだ？なんでこの戦争を始めたんだ？そしてAクラス戦のための作戦を聞いた。どうやら一騎討ちで決着をつけるらしい。戦うのはAクラス代表と坂本君のようだ。一騎討ちでは日本史で小学生問題。百点満点の上限ありで純粋な点数勝負。これで『大化の改新』が何年におきたのか。という問題がきたら勝てると思う。Aクラスの代表さんはこの問題を必ず間違えるらしい。理由はわからないけど…そして今現在…

「あの、坂本君」

「ん？なんだ姫路」

「霧島さんとは、その…仲が良いんですか？」

「ああ。アイツとは幼馴染だ」

「総員、狙ええっ！」

了解しました隊長っ！

そして上履きを構える僕。実は今日の朝、異端審問会に入ってて誘われたんだよねっ

そしてもののみごとに歓迎されたよ（笑）

「なっ！？なぜ明久の号令で皆が急に上履きを構える！？」

「黙ってください男の敵！」

「Aクラス戦の前にキサマを殺してやる！」

「花村まで！？俺が何をしたっていうんだ！？」

あ…つい言葉にでてしまった…

ここにいる男子生徒たちの意見は言葉がなくても満場一致。まあ僕は面白そうだから乗ったんだけど……クラスの団結ってすごいなあー…

「遺言はそれだけか？……まつんだ須川君。靴下はまだ早い。それは押さえつけた後で口に押し込むものだ」

「了解です隊長」

靴下も使うのか…それじゃあこれは…

「隊長、これは？」

僕はなぜか持っていた金槌と五寸釘をとりだした。なぜにもつていたのだろうか…

「いいものもってるね花村君。それは押さえつけたあとに頭に打ち付けるんだ」

「了解です隊長」

「花村！？それは確実にヤバイ！？ていうかなぜ持っている！？」

ほんとになぜなんだ（笑）

「あの、吉井君」

「ん？なに、姫路さん」

「吉井君は霧島さんが好みなんですか？」

「そりゃ、まあ。美人だし」

「……………」

「え？なんで姫路さんは僕に向かって攻撃態勢を取るの？それと美

波、どうして君は僕に向かって教卓なんて危険なものを投げようとしているの!？」

「まあまあ。落ち着くのじゃ皆の衆」

パンパンと手を叩く木下さん…君だったっけ？

…まあ仕方ないか。皆落ち着いちゃったみたいだし…  
僕も持っていた金槌と五寸釘をしまった。

「む。秀吉は雄二が憎くないの?」

「冷静になつて考えてみるが良い。相手はあの霧島じゃぞ?男である雄二に興味があるとは思えんじやろうが」

…あの霧島さん?いいかたが気になつたけど吉井君は納得しているみたいだ…

なぜ?僕なんにも聞いていないんだけど…

「むしろ興味があるとすれば……」

「……そうだね」

「な、なんですか?もしかして私、何かしましたか?」

皆の視線は姫路さんに集まっていた。?どういうことだ?

姫路さんが慌てているということは姫路さん本人も知らないということか…

まさか…霧島さんが姫路さんに興味があるということ?

「とにかく、俺と翔子は幼馴染で、小さな頃に間違えて嘘を教えていたんだ。アイツは一度覚えた事は忘れない。だから今、学年トップの座にいる」

間違えて嘘を教えたんだ…しかも一度覚えたら忘れないってなんと

いう能力だ。僕もほしくらいだ……。ていうか代表同士が幼馴染である意味運命？

「俺はそれを利用してあいつに勝つ。そうしたら俺達の机は……」

『システムデスクだ！』

皆すごいテンションだねー…一騎討ちなら僕はもう関係ないし…もう目立つ事もないけど…  
なぐんか引つかかるんだよね…本当にFクラスが勝つのかな…？

## 第15話 意外と楽しいFFF団（後書き）

はい。左月がFFF団に入りました！  
入った理由は…

「その場のテンション」by左月  
だそうです^^；

## 第16話 Aクラス戦開始！（前書き）

やっとAクラスのところまで来ました！

といっても順番が違っただけでほとんど原作なんですが…

## 第16話 Aクラス戦開始！

左月side

…いまFクラスの代表坂本…だっ たっ けか？いまそいつがAクラス  
の教室にきて宣戦布告してきた。聞いて見ると5対5の一騎討ち  
になるらしい。

あれ？代表同士の一騎打ちじゃないの？

最初はそう言ってきたが、こっちが警戒しているようなんだね

あー…なるほどね…

今は奏汰とテレパシー中です。いまさっき坂本君たちがAクラスに  
宣戦布告しに行ったので奏汰にどうなっているのかを聞いて見たと  
ころ代表同士じゃなくて5対5になるらしい。姫路さんがでること  
を恐れたのだらうね。

…それで、負けたほうが何でも聞く一つ言う事を聞く…だと

え？うそ、本当？

あ、ああ。Fクラスに教科の選択をあたえるその条件としてな…

なんのつもり……なんだろうね

さあな。それでもって開戦は今日の10時らしい

ありがと奏汰。そんじゃまた…

奏汰との会話（念話？）を終わらせる。

へえー…5対5ね……選ばれませんように……って選ばれないよね…

僕は坂本君とそんな話したことないし、あのときのBクラス戦のこ  
とさえばれていなければ…

選ばれる可能性は低い。だとしたら確実に出るのは…代表の坂本君

と、Aクラス並の点数をもつ姫路さん、それと保健体育最強の土屋君かな…あ、あと島田さんも数学はBクラス並だったね…でも相手はAクラス。勝つ可能性は低い…まあ、誰を選ぶかは代表だし、Aクラス戦を楽しみにしますかねえ…

「では、両名共準備はいいですか？」

ただいまAクラスの教室にてAクラス対Fクラスの戦いが始まるうとしている。というか始まった。

Aクラスの教室は広いね…奏汰はいつもこの教室で授業を受けているのか…格差社会っていろいろと残酷なんだね…。

「ああ」

「……問題ない」

「それでは一人目の方からどうぞ」

あの人が霧島さんか…ほんとに美人だな…ここは本当に可愛い人も多いし綺麗な人も多い。

Fクラスの皆がどうしてああなるのかがわかってきたよ…

「それでは私が出ます。科目は物理でお願いします」

…知らない人だな…あ、なんかプラスマディスプレイ…だっけ？なんかでっかい画面に『Aクラス佐藤美穂』って出てる。やっぱりす

「ごいなこの教室。」

「よし。頼んだぞ、明久」

「え！？始めっから僕！？」

「…え？いきなり吉井君？あの人ってなんか得意科目あったっけ…」

「大丈夫だ。俺はお前を信じている」

「ふう……。やれやれ、僕に本気を出せってこと？」

「ああ。もう隠さなくていいだろう。この場にいる全員に、お前の本気をみせてやれ」

「……なんか嫌な予感……」

「その2人の会話に周りは…」

『おい、吉井って実はすごいやつなのか？』

『いや、そんな話は聞いた事ないが』

『いつものジョークだろ』

「こんな会話ができていく。

まあ確かに、いつもの吉井君を見て見たらそう思うのが当たり前なんだろうね…」

「吉井君、でしたか？あなた、まさか…」

「あれ、気づいた？ご名答。今までの僕は全然本気なんか出しちゃあいない」

「そうさ。君の想像通りだよ。いままで隠してきたけれど、実は僕――」

「さあ、どうくる！」

「——左利きなんだ」

物理

Aクラス 佐藤美穂 339点

VS

Fクラス 吉井明久 62点

利き腕かよ。ちょっとだけ期待した僕がバカだったのかもしれないな…

「このバカ！テストの点に利き腕は関係ないでしょうが！」

「み、美波！フィードバックで痛んでいるのに、更に殴るのは勘弁して！」

自業自得だ。まあさすがに殴るのはひどいとは思いますがケド…

「よし、そんじゃ次いくぞ」

「ちよつと雄二助けて！信頼していたのなら助けてよ！」

「信頼？なにそれ？食えんの？」

「キサマ全然信頼していなかったなああああ！？」

あらあら殴られてるよ……

「では、次の方どうぞ」

そしてさつさと進める高橋先生。

生徒が殴られているのに注意もなしですか…

そんなじゃさて…次の人は誰なんでしょうかね……

もうすっかり傍観者気分の僕であつた…

## 第16話 Aクラス戦開始！（後書き）

はい。最初に吉井君きました^^

ちよつと台詞を変えて見ました。順番がちがいますからね…

次は誰が出るのでしょうか？

結構単純ですから、簡単かもしれませんね^^；

## 第17話 Aクラス戦2（前書き）

ここは全部ムツリーニVS愛子で終わっていますね…

「というかすごい点数だな」by奏汰

## 第17話 Aクラス戦2

左月side

さあ、次は誰でしょうかね！

「……………（スック）」

おお！保健体育最強の土屋君じゃないですか！選ぶのはもちろん、保健体育だろう。

前のBクラス戦では400点以上出していたから、勝つのは確かだろう。

そういえば、昨日怒られなかったかな？あとで聞いておこうか…

「じゃ、ボクが行こうかな」

Aクラスからは昨日会った工藤さんだ。やっぱりAクラスだったのか。

昨日、クラス聞くの忘れちゃったんだよね…

「おつ！土屋君。昨日、大丈夫だった？ボク昨日遅すぎるって怒られちゃって…」

「……………工藤か。俺も昨日ものすごく怒られた」

やっぱり土屋君怒られちゃったか…あとで謝りに行かないと…  
工藤さんも怒られたのか…こっちもあとで謝りに行かないと…

「ムツッリーニ知り合い？」

「……………ああ。昨日ちよつとな」

「そういえば、他の人は知らないんだよね。一年の終わりに転入してきた工藤愛子です。よろしくね。」

…転入してきたの！？知らなかったんだけど…

「…それでムツツリーニ、昨日工藤さんと何時くらいまでに一緒にいたの？」

「……………？家に付いた時にはもう１１時過ぎだったか」

「…そうかそうかそんな時間まで一緒にいたのか…（スッ）」

「……………っ！？ち、違う！？そういうわけじゃ…」

吉井君はいつの間にか持っていた鈍器を構えている。

そしてこちらの周りもいつのまにか黒いマント着用し、色々と凶器を構えて殺気を放っている。

もちろん僕も、黒いマントを着用。そしてさっき使っていなかった金槌と五寸釘を構えて殺気を出している。まあ僕は理由を知っているんだけど…ノリだね。ちなみに前まで殺気は出せなかったんだけど、この異端審問会に入っただん殺気を出せるようになったんだよ…。

「おいおい今はやめてくれ。これに勝たないとこっちはいつきに不利になる」

坂本君が助けに入る。まあ今はしかたないよね…

しぶしぶと凶器をしまう僕。周りにいる皆も考えは同じなのだろう。皆、仕方なく凶器をしまう。でもまだ殺気は土屋君に放ったままだった。

…おい左月

ん？なに奏汰？

いきなり奏汰の声が…なんだろ？

…お前もあの変な集団の中に入っていなかったか？

ん？…あああれね。うん、いたよ

…なんなんだあの集団…

人の幸せを許さない異端審問会通称FFF団

…怖え

まあ、あんなに大勢の人が殺気を放っているところを見ると怖いよね…  
そしていつのまにか教科選択も終え、第2回戦が始まるうとしていた…

「あははっ！面白いね」Fクラスは。」

「……………笑い事ではないっ！」

「まあ、そんじゃよろしくね」試獣召喚！」

「……………試獣召喚」

殺気を背に受けながら、第2回戦は始まる。

さて、工藤さんの点数は…

保健体育

Aクラス 工藤愛子 446点

…高っ！工藤さんって保健体育得意だったの！？

この点数…前のBクラス戦のときの土屋君の点数と同じくらいだ…！  
これは手強いぞ土屋君…

「昨日言っていなかったけど、ボク保健体育得意なんだよね♪」

…しかも武器はでかい斧だ。これは当たったらヤバそう…

「それじゃ、いくよっ！」

そして、土屋君の召喚十に攻撃を当てようとした…すると…

「……………加速」

「…え？消えた…？」

土屋君の召喚獣が消えた。

工藤さんも驚いている。え？なにがおこった？

「……………加速終了」

土屋君がそつつぶやくといつのまにか工藤さんの召喚獣の後ろに土屋君の召喚獣が立っていた。

すると、土屋君の召喚獣の点数が出てきた。

保健体育

Fクラス 土屋康太 572点

工藤さんの召喚獣が消えた。

そしてなんなんだあの点数… Bクラス戦のより点数上がってんじゃない…

さすが土屋君といったところか…

「Bクラス戦の時は出来がイマイチだったらしいからな」

坂本君が驚いている人に説明をする。

…あの時の点数でイマイチなんだ…僕にとってはいい方なんだけど…

「…へえ、土屋君も保健体育得意なんだね、負けたことについては悔しいけど、また機会があったらよろしくね」

「……………ふっ、望むところだ」

そしてお互い握手する。やっぱり2人ともお似合いだよ…

僕てつきり工藤さんは悔しがるかと思ったけど…うん、改めてみていい人だ。

土屋君がこっちに帰ってきた。……………あつ！土屋君に謝らないと…

「あの…土屋君。昨日はすみませんでした…」

「……………花村か。いや、連絡を取らなかった俺が悪い」

「そ…そうですか…まあ、お詫びといつちやあなんです…」

「……………？いや、別に…お詫びなん…」

「その後ろにいる皆の誤解を解いてあげますね」

「……………ああ、頼む」

即答…か。

皆まだ土屋君に殺気を放っていた。

まあ、僕はなにが起こったのかも知っているし…説明くらいはできる…と思う。

そして僕は先頭に立っている吉井君に話しかけた。

「…異端者には死を異端者には死を異端者には死を…」

ずっと同じことをつぶやいている…なんという…

「あのー…土屋君と工藤さんのことについては誤解ですよ。僕も一緒にいましたし、ただ鼻血で倒れていた土屋君についてきたただけですし…」

「…え？そうなの？でも——」

「まあ、2人で楽しそうに話していましたが…」

「——標的ムツツリーニ！総員武器を構えろ！」

「了解！」

「……………っ！？おい花村！」

あちゃ、失敗。まあここの指揮をとっているのが吉井君なら…こっちにも手がある！

「…あの…やめないと、これをここににいる全員に見せますよ？（スツ）」

「ん？どれどれ……………っ！皆、武器をしまつて！」

慌てる吉井君。まあ、あたりまえだよね…

いま吉井君に見せたものは…

「な…なんで…花村君がそれを…」

「偶然通りかかりましてね。ごちそうさまでした…？」

「っ！…！」

この前、撮った吉井君と姫路さんのできごとだ。撮ったのは動画だけど、奏汰に見せようと思って抱きついていているところだけを画像に

してもらったよ。まあまだ見せてないんだけど…あーあー…吉井君の顔が真っ赤になっちゃったよ…

「……………花村？なにを見せたんだ？」

「ん？ああこれを…」

「わー！わー！やめてよ花村君！」

慌てて吉井君が止めに入ってきた。

そのあと、土屋君が小声で…

（……………あとで見せてほしい）

（言われなくともそのつもりですよ…）

この間わずか1秒。

まあ、異端審問会に入ったから見せるつもりだったんだけど…でも、Aクラス戦ということで、言うのを先延ばしにしていたんだよね…いまこれが役に立つなんておもってもいなかったよ…

そして3回戦目は……

## 第17話 Aクラス戦2（後書き）

誤解を解いた左月君。

「正直この写真は使いたくなかったんだけどね…」 b y 左月

## 番外編 ハロウィン！（前書き）

ものすごく中途半端なところでの番外編です。

申し訳ございません＞＜

それとグダグダな所が何個か…今日中に出したかったため急いで書いております。誤字があるかもしれませんが、気にしないでいきましよう。まあなんとか…間に合いましたか…？

## 番外編 ハロウィン！

皆「「「Trick or Treat（お菓子をくれなきゃいたずらするぞ）！」」「」

明久「はい、というわけでハロウィンです！皆はお菓子をもらったかな？」

雄二「俺はまだもらってないねえな」

秀吉「そういえばまだじゃな」

康太「…………俺もまだ」

明久「…えっと…（これを読んでくれる人に聞いたなんて…いっちゃだめかな…？）」

左月「誰もお菓子を作っていないんですか？」

奏汰「…俺と左月はお菓子を作ってもってきたんだが…」

明&雄&秀&康「「「Trick or Treat！」」「」」

左月「…………皆さんは持ってきてはいないんですね…まああげますけど…」

奏汰「……………というか…お菓子をもらうということしか考えられなかったのか？」

明久「わーい！ありがとう花村君、藤村君！おかげで久しぶりのご飯を食べられるよ！（モグモグ）」

左月「ひ…久しぶりって…しかもソレお菓子ですよ？ご飯ではありません」

雄二「放っておいてやれ。あいつはあれで普通だからな。どんな食生活を送っているかは知らねえが…（モグモグ）」

秀吉「（モグモグ）…しかしこのクッキー、おいしいのう」

康太「（モグモグ）………おいしい」

左月「あ、それ僕が作ったものです。お口に合ったのなら僕もうれしいです」

明久「うん、すごくおいしいよ！」

雄二「これは…カボチャか？結構いけるぞ」

左月「やっぱりハロウィンといえばカボチャじゃないですか。なんとか入れて見たかったんですよ…でも、そっちの奏汰の作ったケーキはすごいですよ！僕さっき食べて見ましたが……」

奏汰「…そうか？別にすごいという訳では……」

明&雄&秀&康「……（モグモグ）………え？」「」「」

奏汰「な？そんなにうまいという訳では……」

明久「なに…なに、このケーキ…！」

奏汰「…？…なにって…ただ左月と同じように生地にかボチャをまぜただけの…」

雄二「…っ！…こんなの…俺、食べた事がねえんだが…」

秀吉「すごいじゃー！すごく美味なのじゃー！こんなにうまいお菓子は初めてなのじゃー！」

康太「……………（ごくごく）」

奏汰「い、いや…そんなキラキラとした目で見られても…というか、お世辞なんて…」

左月「そういう奏汰は過小評価しすぎ！このお菓子、普通に世界はいけるよ…」

奏汰「いや、なにもそこまでは…」

瑞&美「「Trick or Treat！」」「」

瑞希「というわけで、お菓子をくださいっ」

左月「ん？瑞希じゃん。その格好似合っているね。はい、お菓子」

奏汰「お！瑞希か。ほい、どうぞ」

瑞希「はい、ありがとうございます左月君、奏汰君っ」

明久「うん、ちょっと待とうか。…姫路さん、その格好は…?」

瑞希「…はい、これですか?えっと…悪魔の仮装にしようと思ったのですがさすがになかったのでゴシックローリータ…でしたっけ?そういうのをお母さんに貸してもらいました。どうでしょう?」

明久「…うん、可愛らしいと思うよ」

瑞希「そうですか、ありがとうございます」

美波「Trick and Treat!アキ、お菓子をくれないと(……)悪戯するわよ!」

明久「ちよつと待つんだ美波。それはお菓子をあげても悪戯をするんじゃない」

奏汰「吉井たちはお菓子をもってきていないみたいなんだ。だから俺のをあげるよ」

左月「あ、僕のもよければ…」

美波「ありがと花村、藤村。さあアキ、何処を折られたい?特別に選んでも…」

明久「なんで!?僕なにもしていない腕の関節が逆にいいいいいい!?!?!」

美波「問答無用よ!齒を食いしばりなさいー!」

明久「ふぎゃあああ!理不尽だああ(ボキッ)」

瑞希「よ、吉井君!？」

左月「…なんであの人はあなっただのかな？」

奏汰「それはあいつの複雑な恋心ってやつだ…」

左月「……？」

美波「(なんでウチの格好には気がつかないのよ…ウチだって仮装しているのに…)」

雄二「相変わらずだなお前らは」

翔子「……雄二」

雄二「…気配を消して俺の後ろに来るな」

翔子「…Trick or Treat」

雄二「悪いな。今回はなにも持ってきて…」

翔子「そう…なら、バチバチッ悪戯」

雄二「ちょっと待て翔子。なんで悪戯にスタンガンを使うギヤア  
ー!？」

ズルズルズル

左月「…どっかに連れて行かれているけど…どうしてあなったん

だろう？」

奏汰「……複雑な恋心ってやつだ」

左月「……………??」

康太「……………哀れ」

愛子「まさか、土屋君だけが逃げられるとは思わないでよね」

康太「……………っ!?!?…お前は…工藤愛子っ!」

愛子「ボクも一応仮装してきたんだ」

康太「……………それで、何の用だ？」

愛子「もう…つれないな…: そんじゃ、T r i c k   o r   T r e  
a t ! お菓子を頂戴」

康太「……………俺は…」

左月「今日は僕と奏汰意外皆持つてきていないんです。コレ、よければどうぞ」

奏汰「そういえばさっき代表に渡すの忘れたな…まああとで渡すか  
ほい、お前の投げるから取れよー（ポイツ）」

愛子「（パシッ）よ…っと。ありがと2人ともっ」それじゃ、土屋  
君には悪戯だね」

康太「……………つな、何を」

愛子「何をつて…ほら、土屋君なら…」（チラッ）」

康太「……………っ！（ブシャアアア）」

左月「…いまあの人の着ている服は…魔女っ子かな？にしても…」

奏汰「露出が激しい…てか？まあそこら辺は君（読者）の妄想ってことで」

優子「Trick or Treat!」

秀吉「姉上！？なぜここにいるのじゃ？…それにその格好…」

優子「なによ秀吉。ただの普段着に猫耳つけただけじゃない。それより藤村君のお菓子はものすごくうまいって聞いたんだけど…？」

奏汰「ん？…よくわからねえが、余ってるしほら、やるよ」

優子「ん、ありがと。ではさっそく…」（モグモグ）」

奏汰「ま、普通だと思いがね…どうだ？」

優子「……………アンタ、パティシエになったほうがいいわよ。いえ、ないなさい」

奏汰「いや、なにもそこまでは…」

左月「奏汰は世界狙えるって。天才って羨ましいなー…」

奏汰「お前らは過大評価しすぎなんだって！」

左月「そんじゃ僕はここで…」

奏汰「ちょ！？左月までって…」

優子「待ちなさい藤村君！このケーキの作り方を詳しく…」

奏汰「あー…これは…その…」

左月「…（ダツ）」

奏汰「おい、左月！」

優子「早く教えなさい！じゃないとあなたの関節が…」

奏汰「ちょ！？なんで俺がこうならないといけないんだ！？」

左月「ふう…さて…君はこの状況をどうみますか？」

秀吉「……こ、これは…なんというか…そうじゃな…」

瑞希「よ…吉井君？大丈夫ですか？」

明久「だ、大丈夫だよ姫路さん…ひどいよ美波。僕なにもやっていないのに…」

美波「…そ、そうだったかしら…ねえアキ、この格好…どうかな？」

明久『ん、美波も仮装？…うん。よく似合っているよ』

美波『そ…そうかな…あ、ありがとう…／＼／』

明久『でも意外だなあ美波が天使って。いつも悪魔のイメージが…』

美波『なんですってええー！』

明久『ええ！？僕なんか変なこと左腕の感覚があああ！？！？』

瑞希『み、美波ちゃん！これ以上はちょっと…』

明久『ノオオオオオオ！（ボキッ）』

翔子『…次は（ジャラ）』

雄二『だからお前はお菓子が貰えなかったぐらいでやりすぎだろ！さすがにひどいと思わないのか！？』

翔子『…他の子からは貰っていた…』

雄二『は？俺がか？それって花村と藤村のことか？2人とも男…って翔子？』

翔子『…男でも許さない』

雄二『もう意味わかんねえし！こいつ聞いていねえし！…こうなったら意地でも…（ダッ）』

翔子『……逃がさない（ジャラジャラ）』

雄二『翔子、落ち着け落ち着くんた。話をゆっくり聞けば……』

愛子『土屋君ってこういうエッチな事が好きなのかあ』

康太『……なんのことだか』

愛子『もう、素直じゃないなあ』（ピラッ）』

康太『……俺は別に……っ！（ブシャアアアア）』

愛子『あらー周りが真っ赤だねー……』

康太『……だ……誰のせいだと……っ（ボタボタ）』

愛子『さあ？でもこれは土屋君がお菓子をくれなかった悪戯だよ』

康太『……お菓子は花村と藤村に貰っただろ（ボタボタ）』

愛子『まあ、もうそろそろ危なさそうだし……早く介抱しないとね』

康太『……っ！それって……（ブシャアアアア）』

愛子『あれ？ボク、なんか間違えた事言っただけ？』

奏汰『……それでもって型に入れてレンジで180度、10分くらい』

…だっけか？それであとは型から出来上がった生地をとりだして飾り付ければ完成だ…これでいいか？」

優子『うーん…イマイチね』

奏汰『…はあ？』

優子『どうしてこれであんなにおいしくできるのかしら？コレ普通のケーキにカボチャを入れただけじゃない！』

奏汰『だから、普通に作ったっていったろ？お前らは過大評価のしすぎなんだよ』

優子『いや、アンタまだ他に隠し味みたいなのを隠しているんじゃないでしょうね？』

奏汰『いや、俺は別に…そんなわけじゃ…』

優子『早く答えなさい…さもなくば…』

奏汰『なんで俺の腕を掴むんだ？というか本当にレシピはあれでーってちよつと待て。本当なんだって！だから関節技をかけるのは——っ！』

秀吉『…カオス…じゃな…』

左月『あーあ…奏汰が被害者に……まあいいか』

秀吉『いいのか！？言っておくが姉上の関節技は本気でやばいのじ

やぞ？ワシが何回も経験しておるから言えることなのじゃが素人にあの関節技を決められたら…たぶん…」

左月「……はい。最初にあのひとが言ったように皆はお菓子をもらえたでしょうか？貰ったらその場で遠慮なく食い散らかしましょう。」

秀吉「結局放っておくんじゃな……それと、食い散らかしては駄目だと思っのじゃが…」

左月「軽いジョークですよ。お菓子を貰ったら感謝をこめて残さず食べましょうね……こんな感じの言い方です……ですか？」

秀吉「……まあ、さつきよりはマシな方かと思うぞい」

左月「それではこんなおかしな作品を読んでくださって誠にありがとうございます。グダグダな作品ですがこれから『バカと転生者と召喚獣』をよろしく願います」

秀吉「……それより明久たちは……」

左月「……放っておきましょう」















そして人気のない場所にて…

テオス「……………おい左月」

左月「大丈夫だよ。忘れていないから…はい、これ僕の。ついでにさっき奏汰からも取っておいたやつ」

テオス「……………持つべきものは友達だね（泣）」

左月「神様が言うかな…？……………まあいつか」

テオス「（モグモグ）…すごい…すごいまいよ…」

左月「さすが奏汰だよねー…僕もう自信なくしそう…」

テオス「?…そうか?左月のもすごくうまいと思うけど…」

左月「そうかな?…まあ、ありがとね♪」

テオス「……お前…奏汰は無理でも、俺には素直になれよ。一応、神だからな♪」

左月「…やつぱ神にはわかつちゃうか…まあ、できるだけがんばってみますよ…」

テオス「というか…意外だよなー…お前って…」

左月「はいはい。意外なものも、それが僕なんですよ!」

テオス「まあ、どの秘密もいつ明かすかはお前の自由だからな…と  
いっても、お前の秘密って結構あるよな…」

左月「普通に少ないと思うけど…」

テオス「まあ、これからを楽しみにしていきましょうかね…♪」

左月「…そんなに面白い展開はないと思いますが…ね」



## 番外編 ハロウィン！（後書き）

なぜ左月が瑞希と呼んでいるのか。そこらへんは後々わかるようになりませう^^；

雄二、翔子ファンの方には謝っておきます。ごめんなさい…><正直あの二人はどうやって書き表すのが難しいです…

まあ他のキャラクターもそうなのですが…

というわけで、次回もよろしくおねがいします^^

## 第18話 Aクラス戦3（前書き）

コレを見てなんで順番を変えたのかわかると思います^^；

「なにか…僕の出番が少ないような…」 by 明久

## 第18話 Aクラス戦3

左月side

「では、3人目の方どうぞ」

「は、はいっ！私ですっ」

ここで姫路さんか……相手はどう来るか……

「それなら、僕が相手をしよう」

Aクラスからは——誰だ？

一応でつかい画面上では……久保利光……ってあるけど……

「やはりきたか、学年次席」

坂本君がつぶやいた。

ああ。学年次席ね……それってこの学年の2番目に点数が高いつてこと……？

……それって……ヤバくない？

「科目はどうしますか？」

「総合科目でお願いします」

「ちよつと待った！何を勝手に——」

「構いません」

「姫路さん？」

クレームをつけようとした吉井君を止める姫路さん。

…？気のせいかな、姫路さんのオーラがいつもと違うような…

「それでは…始めてください」

「いきます！試獣召喚！」

「それではこちらも。試獣召喚」

そしてそれぞれの召喚獣が呼び出されたと同時に――

## 総合科目

Aクラス 久保利光 3997点

VS

Fクラス 姫路瑞希 4409点

一瞬で決着がついた。

さすが姫路さん！学年次席を追い越すなんてすごい！…というか…  
総合科目ってあんなにいくんだ…僕なんて1000点もいっていないのに…

「ぐっ…！姫路さん、どうやってそんなに強くなったんだ…？」

悔しそうに聞く久保君。仕方ないことだろう。せつかく学年次席になったのに負けてしまうなんて…

「…私、このクラスの皆が好きなんです。人のために一生懸命な皆のいる、Fクラスが」

「Fクラスが好き？」

「はい。だから頑張れるんです」

ただ好きなだけで頑張れるのか…すごいな…憧れちゃうよ。

というかFクラスが好きって…皆はそれに喜びを抱いているんだろ  
うな…

まあ…僕はなんというか…複雑な気持ちなんだけど…

「これで2対1です」

高橋先生のポーカーフェイスが崩れた。

Aクラスが負けてるもんね…これはどうなることやら…

「それでは次の方、どうぞ」

「アタシが行くわ」

…？木下君？なんでそっち側にいるんだ？それに女子の制服を着て  
いるし…あれ？

「それでは、ワシが行こう」

あれ？秀吉君が2人？…という事は…双子？

「ところでさ、秀吉」

「なんじゃ？姉上」

やっぱり双子か…しかもあっちのほうが姉なのか…

「Cクラスの小山さんって知っている？」

「はて、誰じゃ？」

「じゃーいいや。そのかわり、ちょっとこっちに来てくれる?」

「うん? ワシを廊下に連れ出してどうするんじゃ姉上?」

ん? なにが起こっているんだ? Cクラスになんかしたっけ?

『姉上勝負は――どうしてワシの腕を掴む?』

『アンタ、Cクラスで何をしたのかしら? どうしてアタシがCクラスの人達を豚呼ばわりしている事になっているのかなあ?』

『はっはっは。それはじゃな、姉上の本性をワシなりに推測して――あ、姉上っ! ちがっ……! その関節はそっちには曲がらなっ……!』

なにがなんだかわからない……さては……僕が休んでいる間なんかあったの?

それにしてもこの学園は美女が多いかわりに暴力沙汰が一般的になっているのだろうか?

そう考えていたら木下さんが扉をあけてが戻ってくる。

「秀吉は急用ができたから帰るってさっ。代わりの人をだしてくれ――」

「ちょっとまってくれ木下」

返り血をハンカチで拭きながら戻ってくる木下さんをつまむ気が? ……というか、この声……

「そういうことなら俺が代わっていいか? ちょうど戦いたい奴がいるんだ……」

「……藤村君が言うなんてめずらしいわね……いいかしら代表?」

「……別にいい。そのかわり、絶対に勝って」

「まあ、がんばってみますよ代表さん」

奏汰じゃん！突っ込むかと思ったら…違ったのか…  
というか戦いたい奴って…ま…まさか…

「左月！いるんだろ！」

僕は一瞬で椅子の陰に隠れた。

## 第18話 Aクラス戦3（後書き）

次回は左月VS奏汰です。オリキャラどうしでやってみたかったですよ…

「…？…確かあいつの点数って…」by雄二

第19話 左月の成績は…？（前書き）

ここでは…左月がどれだけ頭が悪いかというのがわかんと思います。

## 第19話 左月の成績は…？

左月side

「左月！いるんだろ！」

一瞬で隠れる僕。ふう、これで一安心…

「……………花村。呼ばれているぞ」

なわけなかった。土屋君つてすごいねー…  
一瞬で僕の居場所を突き止めるなんて…

「…何で僕なんかが…僕このクラスのなかで一番点数低い人かもしれないのに…」

「……………一応聞く、数学何点だ？」

「7点」

「……………」

何も言わない土屋君。咄然としている様子。

ふっ…今回は結構点数上がったけどやっぱり一桁が多い。

とぼとぼと歩き、坂本君の所まで来た。

「…なぜお前が指名されたんだ？」

「…僕にもさっぱりのものでして…」

「きつと絶対勝てると思って選んだんだろうな。逝ってこい」

「字が違う気がするのには気のせいでしょうか？…まあいつてきます

…」

そして仕方なく前へ出る。

僕は目の前にいる奏汰と目があつた。

「…なんで僕を選んだの奏汰？他の人達でもいいでしょう？」

「お前、隠してるだろ？だからここではらそうと思つてな」

「…？僕別に隠していることなんて…」

「お前の本気…だよ」

「…僕は本気を出してもほとんどの教科の点数が一桁つてわかつていつてる？」

「ほとんどが…だろ？」

「……………なるほどね」

つまり、僕の得意教科の点数をここではらすつてことか……まあここでこの展開はおもしろそうだけど……いいのかな？そして僕たちの会話を聞いていた周りの人達は…

『なんだ？花村も吉井と同じジョークか』

『でも、相手がああ言つてんだぜ？』

『でも、あいつの点数はほとんど一桁だぜ？』

…こっちはどうやら半信半疑の様子。そして坂本君たちのグループはというと…

『あいつは何が言いたいんだ？花村の言うとうり、アイツはほとんどの教科の点数が一桁のはず…』

『…花村君も無理しなくて良いのに…』

『でも、Aクラスの藤村がああいつておるのじゃぞ？』

『いや、今日点数を書いた紙を集めただろ？すると…』

花村 左月

|    |     |      |     |     |    |      |    |
|----|-----|------|-----|-----|----|------|----|
| 国語 | 27点 | 古典   | 3点  | 数学  | 7点 | 物理   | 9点 |
| 化学 | 38点 | 日本史  | 4点  | 世界史 | 6点 | 現代社会 | 1  |
| 7点 |     |      |     |     |    |      |    |
| 英語 | 0点  | 保健体育 | 10点 |     |    |      |    |

『…こんなんだぞ』

『……これって僕よりひどい…しかも英語0点って…』

どうやら朝に出したあの紙を見ているようだ…

いや、でも補習でつけた教科は上がっているんだよ？前までは英語以外全部一桁だったんだよ？でも英語だけ、嘘を書かせてもらっています！正直、今回は出来がよかったんだよね〜♪

…それじゃ、ここではらそうか…皆の反応が見たいし♪

「お前…本当にいままで本気をだしていなかったんだな…」

「あれえ？気がついた？ご名答。今までの僕は本気なんか出しちゃあいない」

気づいた人もいるようだが、この台詞はさっき吉井君が言っていた台詞だ。

これを聞いた本人は…

『あれ？…この台詞、どこかで聞いた事があるような…』

『バカか明久、コレはさっきお前が言っていた台詞だ』

『…あ！そうか…という事は花村君も左利き？』

『…でも、藤村が言っていた花村の本気って…』

忘れてたんだ……まあいいか…

「そんじゃ先生科目は英語で」  
「…わかりました」

よし来た！僕の得意教科！

「本気でいくよ奏汰」  
「そんじゃ…試獣召喚」

英語

Aクラス 藤村奏汰 610点

奏汰の召喚獣は職業で言う画家の格好をしていた。武器はペン。  
つというか点数…高くない？

『っ！なんだあの点数は！聞いていないぞ！』  
『…あんな点数ムツリー二の保健体育でしか見た事がないよ！』  
『あんな点数、私もとったことがあります…』

皆驚いている様子。正直僕も驚いている…だって奏汰は英語が苦手  
なはず…

『っ！？ちよつと藤村君！？なによあの点数！聞いていないんだけ  
ど…』

『…………私より上』

『え！あの点数、代表よりも上！？』

「…あー、俺も正直びっくりしてんだ。俺に聞かないでくれ…」

どうやらAクラスも知らなかったみたいだ。そして本人もビックリだなんて…

まあ奏汰は『天才』だから仕方のないことなのかな…

うーん…勝てるかな？まあ、自信はあるんだけどね…

それでは僕も…

「それでは……今まで隠してきたけど実は僕——」

そして間をおいて皆にこう告げた。

「——英語は得意教科なんだよね！試獣召喚！」

英語

Fクラス 花村左月 615点

『『『……………は？』』』

皆間拔けな声を出していた。高橋先生もビックリしている様子。

プツ……プツ…駄目だ笑っちゃう…

「本当はもうちょいばらすのは先にしようと思ったけど、姫路さん

の言葉を聞いてなんだかバカらしく思えてきてね…それに、皆のおもしろい反応もみれたし…」

そんじゃま、行きましようかね…

こうして4回戦が始まった…

第19話 左月の成績は…？（後書き）

英語以外は明久以下という設定です。

いつからか奏汰に質問されていた5教科の点数のことですが、あれは英語で100点を取っていてそれ以外は… ってことですね。

「比べて見ると結構上がっているでしょ？」 by 左月

そして反対に奏汰は天才です。

バカ&天才ってところですね^^；

第20話 Aクラス戦4（前書き）

左月VS奏汰

どちらが勝つのでしょうか…

## 第20話 Aクラス戦4

明久side

英語

Aクラス 藤村奏汰 610点

VS

Fクラス 花村左月 615点

僕は幻覚を見ているのだろうか…

花村君の英語の点数が教師並の点数って…

「本当はもうちょいばらすのは先にしようと思ったけど、姫路さんの言葉を聞いてなんだかバカらしく思えてきてね…それに、皆のおもしろい反応もみれたし…」

『『『はあああああ!!???』』』

花村君の点数に叫ぶ皆…。僕も驚いている…。

え…じゃあ、あの雄二に出した紙に書いてあるのは…嘘？

「花村の野郎！やりやがったな！」

「すごいっ！すごいよ花村君！」

「…………まさか、Bクラス戦のあれは花村が」  
「その可能性が高いな。しかしこんな奴がまだいたとは……」

花村君のおかげでFクラスの土気は最高潮までに上がっていた。

『かつこいいぜ花村！』

『このままAクラスに勝てちゃいそうだな！』

『まあ、俺は花村を信じていたけどな！』

点差はわずか5点……

でもこれで花村君が勝てば、Aクラスの教室が手に入るのは確実だ！

「そんじゃ……いこうか奏汰」

「……ああ！やろうか左月」

左月 side

Fクラスの土気が最高潮になったとき、戦いは始まった……

さて……ここからは真剣に行こうか……

奏汰を甘く見ると……こっちが負けてしまうから……

つとその前に……

奏汰……学園長に呼ばれた時の……頼まれたあれなんだけど……

………のことが

うん……あのことは気にしないで、遠慮なくかかってきなよ！

……でも、それじゃおめえが……

……本気で行きたいの……僕、これまでFクラスの皆になんもやって

あげられていなかったから…

……お前…意外とそういうの言っただな…

…わ…悪い？

…そんじゃま、遠慮なくいかせてもらおうじゃねえの！

！…ありがと…奏汰

奏汰からの了解も受けたところで…

「それじゃまずこっちからいくよ！」

僕は僕の召喚獣の武器である鎖、それを4本全部使って奏汰の召喚獣に攻撃をしかけた。すると…

「あまいぜ！」

その攻撃はいとも簡単に避けられた。そして奏汰の召喚獣が僕の召喚獣の真後ろにきていた。

「っ！！」

ジャンプして攻撃をよけながら奏汰の召喚獣に鎖2本をなげる。けれどもその攻撃ははじかれてしまい一気に間合いを詰められた。そして奏汰の召喚獣が武器であるペンを槍の様に扱い、突いて攻撃してきた。なんとかぎりぎりで避けた…けど…

英語

Fクラス 花村左月 492点

「っ！…その…武器は…」

「ああ、これは掠っただけでも点数はすごく減るぜ？このペンは攻撃力が高いんだ」

「…………へ、へ…」

…あの点数でこの攻撃力はチートでしょ！？  
掠っただけでも…

…ものすごく痛みを感じる…

僕は掠ったところを抑えながら必死に召喚獣を操っている…くっ…  
点数が一気に減ったから…こっちが不利になちゃった…だったら…

「くっ…『鎖の舞』！！」

英語

Fクラス 花村左月 292点

「うわっつつ！？」

腕輪を使って奏汰の召喚獣の真上に10本の鎖を降らせた。

あらら…10本降らせたから10×20で2000点消費しちゃったよ…

英語

Aクラス 藤村奏汰 401点

…全部…ではないけど、何本か当たったみたいだ…

よし！それじゃ、この10本の鎖を使って…まず、2本の鎖を操り奏汰の召喚獣に向かわせる。けどそれはまた簡単に避けられる。そしてその避けた所に向けてさらに5本の鎖を向かわせる。奏汰の召喚獣は武器で防いだみたいだが、後ろがから空きなため残り3本の鎖をそこに向かわせた。

そして見事に攻撃が当たる…と思ったら…

「…『写し絵』！」

そういうと奏汰の背後に当てようとした鎖が一本の鎖に弾かれた…。だけど全て弾き返せてはいなかった、一本だけ奏汰の召喚獣に鎖が当たった

けど…さっきの奏汰の腕輪の能力って…僕の腕輪の能力！？

まさか…相手の腕輪の能力をコピーできるっていうの？  
でも…

英語

Aクラス 藤村奏汰 189点

消費点数がものすごいみたいだ。

僕の攻撃は当たっていたけど点数が低くなっただけだからそんなに減らなかったはず…

やっぱりそれなりの危険<sup>リスク</sup>っていうのが奏汰の召喚獣にもあるみたいだ。

僕の腕輪の能力がパクられても、点数はこっちのほうが上だ…けど…

「…前にCクラスと試召戦争をやっておいてよかったぜ…じゃなけりや、操作方法とかわからねえもん…」

「…っ！やっぱり奏汰はすごいねえ…さすがに憧れちゃうよ…」

さつきから鎖を操って攻撃を仕掛けても滅多に当たる事はなく、ここごとく避けられる。

やっぱり奏汰はすごすぎる…正直勝てる気がしない。

奏汰は飲み込みが早い…って言ったほうがいいのかな？

やったことはなんでもすぐに覚えてしまう…もちろん勉強のほうでもね。そのため、このまえやったであろうCクラス戦でもう召喚獣の細かい操作方法とかを覚えてしまったと言うのだ。こういうのを真正正銘の天才というのかもしれない…

それに違い僕は奏汰と違い飲み込みが悪い。試召戦争をやった回数にはFクラスのほうが多いけど、僕はすぐに補習室送りにされてしまったためそんなに召喚獣を操れていない。このまえのBクラス戦のことがあったとしてもそれは点数の差で勝てたようなものだ。

つまり、僕はそんなにうまく召喚獣を操れないけど、奏汰は召喚獣をうまく操れる事ができる…だから点数はこっちの方が高くても…

「…隙ありっ！」

「っっ！…」

英語

操作技術は奏汰のほうが上なため、点数の差なんて今は関係ないってことになる。

ついでに攻撃力が高いため、奏汰の召喚獣の点数が低くてもものすごいダメージがくる。

…吉井君の気持ちが今すぐわかる。攻撃が当たったところがめっちゃ痛い…

でもまた攻撃があたったら僕は一発で終わるだろう…

鎖をきいてうまく間をとり、3本の鎖を交差させ奏汰の召喚獣に向かわせる。

「…へえ、そんな使い方もあるってか！」

やはり避けられる…けど、それはお見通しってね！

さっきやった方法で空中ではうまく操れていなかったからそれをねらって…

さっきのように残りの鎖を交差させ、攻撃に向かわせる…すると見事に…

英語

Aクラス 藤村奏汰 69点

「ちっ…」

「…やっと…あた…っ…た」

攻撃が決まった。でもやっぱり疲れる。

そんなに使わない頭を使った事と、フィードバックの影響だ。

正直、立っているので精一杯の状況だ。頭を使うつてこんなに疲れるのね…

さて…そろそろ…奏汰は気づくだろうね…

「なるほどな…さてはお前、鎖を操っているときは召喚獣を操れないんだな」

僕の腕輪の能力の弱点に…ね。

「…さっすがだね奏汰………大正解だ」

奏汰の言う通り僕はこの能力を使って鎖を操るとき、召喚獣は動かせないのだ。

鎖を操る事に集中しないといけないからね…。鎖は鎖、召喚獣は召喚獣、

と言う感じで操らないといけない…この隙をつかれて攻撃されたら僕の召喚獣は動けないためやられたい放題…これが僕の腕輪の能力の弱点だ。

気づかれたからには、急いで決着をつけないとね…！

僕は一本の鎖を使い、奏汰の召喚獣の動きを見ている。さすがにさつきみたいな避け方はやめたのだろう、慎重に避けていた。奏汰は腕輪の能力で出した鎖を使ってきた。

僕の操っている鎖と鎖の間を上手くぬけて奏汰の操っている鎖が僕の召喚獣に当たった。

英語

Fクラス 花村左月 54点

「っい！…」

鎖で攻撃してきたためか、いつもより点数の減りが低かった。でも痛い…

けど、これでどっちかの攻撃が当たったら最後だろう…次で決めないと！

「…次で最後だろうな…決める！」

「…こつちも…行くよ！」

奏汰の召喚獣は僕の攻撃を上手く避け間合いを詰めてきた。

それに僕も反応し、すべての鎖を奏汰の召喚獣に向けて放った…

そして…

「っいつけええーっ！！」

ザンッ

…どっちが勝ったのかを確かめようしているのかAクラスの教室内は静かになった…

…その中、小さな声で…疲れたような声で僕はつぶやいた…

「…Fクラスの…みなさん…」

英語

Aクラス 藤村奏汰 2点

V S

Fクラス 花村左月 0点

「勝て…な…くて…ごめ…ん…なさい…」

ものすごい疲れと激痛で僕は意識を失った――

## 第20話 Aクラス戦4（後書き）

勝ったのは奏汰でした。

ここだけ妙に長いですね… ^^ ;

しかもグダグダって… orz

第24話 奏汰が瑞希と…？（前書き）

あらすじ…

左月があまりの痛さに気絶してしまいました。

## 第24話 奏汰が瑞希と…？

瑞希 side

「勝て…なくて…ごめ…ん…なさい…」

バタッ

花村君はそう言って倒れてしまいました…。

「「「花村<sup>くん</sup>！」「」」

Fクラスの皆が花村君に駆けつけていきました…。  
そばにはもう藤村君がそばについていました。

「……学園長から聞いたが…こんなにひどいものなのか…」

不意に藤村君がそんな事をつぶやいていました…

学園長？ひどいもの？…なんで花村君は倒れてしまったのでしょうか？

藤村君が言った事に、なにか関係があるみたいですね…  
坂本君もそう思ったみたいで…

「…藤村…これはどういうことだ…」

「………こうなることはわかっていた」

「え？…どういうこと…？」

「…説明は後で…だ。俺は左月を保健室に運ぶ。そんじゃまた…」  
「まってください！」

「……なんだ？」

「……私も…付いていつていいですか？」

「…坂本。いいのか？」

「…好きにしろ…」

私は藤村君についていく事にしました。

やっぱり、花村君のこともありますし…あと…

どうしてここまでがんばってくれたのかを…私は聞いておきたいから…

そう考えていると後ろから…

『あとは代表にまかせてゆつくり休めよ！』

『おつかれさま！』

『かつこよかつたぜ花村！』

そんな花村君への声援を受けながら私と藤村君は保健室にむかった…

保健室にて……

花村君を運んでくれた藤村君は花村君を保健室のベッドに優しく寝かせてくれました。

さつき保健室の先生から聞きましたけどものすごく疲労がたまっていたみたいです…。

さつきの藤村君との戦いでこれほど疲れるわけがありません…普段から何をやっているのでしょうか…？そして私は気になったことを

藤村君に聞いてみました。

「あの…藤村君…」

「ん？なんだ姫路…だっけか？」

「あ、はい。姫路瑞希です」

「まあわかると思うが藤村奏汰だ。それで…なんだ？」

「えっと…花村君。藤村君と戦っている最中になんか痛がっているような感じがしたんですけど…なにかあったんですか？」

お腹を抱えているようにみえていましたし…坂本君もなんか心配していましたから…

「…『観察処分者』って知っているか？」

？…観察処分者ってたしか吉井君の…

「はい。知っていますよ」

「バカの代名詞とも言われるやつ…その観察処分者に左月はなってしまうんだ」

「…？どういことですか…？」

たしか滅多になれない…と坂本君から聞きましたし…

その観察処分者の召喚獣には特別な…あつ！

「その観察処分者には物体にさわれるということと、フィードバックというものがついてくる。召喚獣の受ける痛みが本人に直接その痛みが返ってくるんだ。…全部ってわけじゃないみたいだが…それに左月はやられてしまったんだ…」

「そ…そんな…藤村君は…花村君が観察処分者だとわかっていて…」  
「…俺だって正直…手加減をしようと思った…けど左月が言ったん

だ。手加減するなってな…」

「…そう…ですか…」

…花村君には…あのときどんな思いをして戦っていたのでしょうか…  
なんで…痛みが返ってくるとわかっていて…

「…左月は『これまでFクラスの皆になんもやってあげられていなかったから』っといっていた…けど、やっぱりやりすぎたかもな…」

…なにも…やていなかった…それだけで…

「…花村君って…意外と優しい方なんですな…」

「否定はしねえな。ものすごく人見知りだけどな…」

「私…花村君と仲良くなりたいです…」

「お、そうか。こりや左月も喜ぶかもな…でも左月を素直にさせるのは難しいかもな…俺にだって素直にならないんだからな…」

「え！？あれで素直じゃないんですか？」

「ああ。俺は違うと思うね。なんか…ギクシャクしてるっていったらいいのか？」

…なんか…どんどん花村君の本性がみたくなってきました…

「それでも…仲良くなりたいです」

「…そうか…がんばれよ」

「藤村君もですよ」

「……はあ？」

あたりまえです♪

花村君は藤村君と仲がいいですし…

「私は見たんですよ？放課後花村君と一緒に補習を受けている所を……」

「……ああ……あれは別に、左月の成績が悪すぎてだな……それで……手伝おうと……」

「それに……友達が多い方が楽しいじゃないですか」

「……まあ……確かにそう……だが……」

なによりこの2人は人思いの優しい方ですし……え？なんでわかりま  
すかって？……そうですね……女の勘……って言うものですよ」

「……まあ……これからは友達としてよろしく願いますね」

「なんかそういうとすごく恥ずかしいんだが……まあ、よろしくな」

恥ずかしそうに私と握手する藤村君……あ、いえ……奏汰君って言った  
ほうがいいでしょうか……？

「それでは仲良くなったからには、奏汰君を吉井君達にも紹介をし  
なくては……」

「えっと……いきなり奏汰って言われちゃっているんだが……まあいつ  
か……そっちがそうならこっちも瑞希って呼ぶ事にするが……」

「はい、別に私は気にしませんよ」

むしろその方が気楽ですしね……そういえば……男友達の中で瑞希って  
呼ばれるのは奏汰君しかないような気が……

「あと、左月を友達にするならちゃんと『友達になってください』  
って言う事だな」

「……そうなんですか？別に言わなくても……」

「左月は自分で認めることと、その認めた人の許可が必要だと思っ

ているんだ。まあ普通はそんなに警戒しなくてもいいんだが…過去になにかあったんだと思うんだよな…」

「……………そう…ですか…」

…そんなに警戒しなくてもいいと思うのですが…そう思っていたら…

「…うん？……………奏汰に…姫路さん？」

第24話 奏汰が瑞希と…？（後書き）

奏汰と瑞希はお友達になりました^^

…これからどういう展開で行きましょうかね…

一応ヒロイン（？）は決まっています…

## 第22話　そんでもって左月も…

左月 side

「…うん？…奏汰に…姫路さん？」

僕は目を覚ましたら、すぐ近くにいる人の名前を言った。

……そういえば僕…Aクラス戦で奏汰に指名されて、戦う事になつて…

それで…えっと…奏汰の攻撃力はチートで…フィードバックでものすごく痛くて…

そんなに使わない頭を使って…それで…たしか……奏汰に負けて…

『勝て…な…くて…ごめ…ん…なさ…い…』

なんとというありがちな台詞を……！

なにこれ！？なんでこんな発言を……！

いやだなんでこんな発言をいつてしまったんだ……いや、でも…

小声で言ったから聞こえていなかったはず……ていうか聞こえていないでほしい！！

しかもそのあと倒れるって……！なにこの台詞！めっちゃ恥ずかしい……！

かつこつけた自分馬鹿じゃん！？…いや馬鹿なんだけど……僕の馬鹿野郎！！

そんなこんなでいろいろと自己嫌悪に陥っているところ…

「…大丈夫そうだな左月…」

「え？なんでわかるんですか？表情なんにも変わっているようには

見えませんが…」

「そこは瑞希の頑張りどころだな…」

「え、え？なんですか頑張りどころって…」

…どうやら奏汰は僕の考えている事がだいたいわかっているようだ…  
なんか心読まれているみたいで…怖い…

「ちなみに言うと…」

「…??」

「左月の最後の台詞…ちゃんと皆に聞こえていたからな」

「っ!？」

「…あ、なるほどそういうことですね」

な…ん…だ…とっ！

聞こえてしまった…だとっ!？

あーあー…こりゃ…皆に嫌われたかもな…なんか…

これから…避けられそうな…そんな予感…あー……なんであんなこと言ってしまったんだろう…戦いに参加した事にものすごく後悔…やっぱでしゃばらなければよかった…

あーもう……ていつかなんで姫路さんがここに…

「花村君って…本当に素直じゃないんですね」

「本当に…な」

なぜか温かい目で見守られながらそういう奏汰と姫路さん。

え？なんでこんな会話になっているの？

スナオ？なにそれ？おいしいの？

「こいつの性格上、なにかを隠しているように見えなくはないんだが…」

「…確かに…花村君なら…ありえますね…」

「えっと…お2人とも…なんの話を…」

隠していることなら……確かにあるけど…

正直ここまでできてしまったから隠し通さないとなあーって感じだし…まあもう一人ばれているけど…

「あ！花村君も、私の友達になってほしいのですが…」

「そういえば左月。瑞希と俺はもう友達だから、お前もコイツを瑞希ってよんでやれ」

「なんでそこからそうなるの？」

急にどうかしたのか奏汰は…それに姫路さんと友達だなんて…

「えっと…なぜ？」

「花村君は奏汰君と私が友達になっちゃいけないって言うんですか？」

「いや…別に…そういう訳ではなくてですね…」

なんでいきなりそうなったのかを聞きたくてですね…

「…まず、その敬語から直していただきませんか…奏汰君とは普通に話せているんですから…」

「え？えっと…姫路さん？」

「おい、瑞希だろ？」

「奏汰！？…え…えっと…」

そ…そういえば…奏汰が姫路さんのことを『瑞希』、姫路さんが奏汰のことを『奏汰君』って呼んでいるし…でも…本人がああやって言ってもらっているから…

「えっと…本当に大丈夫ですか？僕、結構性格悪いように思いますけど…」

「どこがですか？」

「…え？」

だって、さっきのAクラス戦のときだって一人で熱くなるなんて…変だと思われたし…馬鹿だし…

それに…素直になるのが苦手だし…実際に奏汰には素直にみえるけど…まだ隠している事とか結構あるし…

「私はただ、花村君とお友達になりたいだけなんです…駄目ですか？」

「そんなに難しく考えるなよ左月。俺の時もそうだったが…こういつてくれているんだぜ？…それに少し素直になれるようにしねえとな…俺だって本当のお前を見た事がないんだから…」

「…僕は奏汰には素直になったつもりなんだけど…」

…まあ、正直奏汰にも本当の性格を隠しているのは本当だ。…奏汰は読心術が使えるんだね…気をつけないと…でも…まあ、いつか。姫路さんもいい人みたいだし…

「えっと…姫？…瑞希…だよな？こんな僕でいいなら、これからもよろしくね」

「…！…はい。よろしくお願いしますね左月君」

「…僕、女の子に『左月』って呼ばれるの始めてかも…まあいつか…」

ここにきてからだけど…瑞希と…ねえ…うん大丈夫かな？

「ふふ」私も今日だけで2人の男子に瑞希って呼ばれるのは始めて  
かもしれません…」

「へえ…そうなんだ…」

「そんじゃま、左月も元気になったところで、勝負の結果をみてい  
きましようかね…」

「あ…そういえば…」

すっかり忘れてた…そういえば僕と奏汰のもう4回戦だったんだ  
よね…

「皆さん、あのあと左月君が倒れたら一気に左月君の所に駆けつけ  
てきてくれたんですよ…」

「…え？」

「そうそう、俺もびっくりしたんだぜ？」

「……………」

…負けたから…なんか文句を言いにくたのかな？

「…そうか…僕が負けたから…皆で文句を言い…」

「いや。そうじゃねえ」

「…？」

「皆さん心配してましたよ？あと、『よくやったな』とか『あと  
はまかせておけ』とかも言っていましたし…」

「…へ…そう…なんだ」

…そう言われていたんだ…てっきり文句かと…

Fクラス…面白いだけじゃなくて優しいところもあるんだなあ…

ここの学園…ここの世界の人は皆そうなのかな？

「…そんじゃ、いきますかね…」

「そうですね。いきましょか」

「あ、うん…」

ちよつと複雑な気持ちを抱えながら返事をする。

僕はベットから降りてAクラスの教室に行こうとする奏汰と瑞希の  
後を追った…

第22話 そんなもって左月も…（後書き）

左月起きるの早くない？

という突っ込みはスルーの方向で…^^;

左月は切り替えが早いかもしれませんがね…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3076x/>

---

バカと転生者と召喚獣

2011年11月17日20時11分発行